毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊 定價金五錢

明治二十九年十一月廿五日發兌



第九拾號

柴四朗君　徳富猪一郎君序　菊池謙讓著

朝鮮王國

四六版　六百頁
定價五十錢
郵税八錢

○日本新聞評●●●●●　朝鮮實に是れ我邦人の忘れんと欲するも忘る可からざるの國たり、しかも其伊藤内閣が朝鮮に於ける蹉跌は爾來又前日の意氣を見ず我人心失望の結果は漸く此研究問題を抛棄し去らんとして徒らに彼露人の跳梁に一任するに至るの風となれり豈慨す可き事ならずや、長風菊池謙讓君は久しく彼地に在つて其事情に通ぜるの士曾つて十月八日事變を以て獄に廣島につながれしは世人の知る所其半島問題に就いて論ずるもの又一日にあらざる也、而して今や朝鮮王國は此朝鮮通の子が手によつて吾人に紹介せらる其濶々たる商賈著書と其撰を異にせる固より其所たるべし、一篇地理部社會部歷史部近世史にの分ち秩序整然一讀能く其事情を知らしむ蓋し王國大体の事を知るに於て適好の物となす可し、志士一本を坐右に備へて可なり

○大日本の評●●●●●　朝鮮半島の半ば衰亡に瀕せるか嗟乎、慨然として筆を執るもの、菊池謙讓氏の『朝鮮王國』となす氏は熊本の人曾て朝鮮に遊び、長風生の名を以て國民新聞紙上に通信したるもの屈指に遑あらず、其親しく踏査し觀察したる所のものを執つて、半島の地理、社會、及歷史を描く、『朝鮮王國』は是なり。昔は史家ギッボン少壯にして羅馬に遊び、ジュピトルの太廟に晩拜の頌歌を聞き、浩嘆長吁して羅馬帝國衰亡の史を編するに至りしを聞く、氏が此書ある、舊其茅屋頹壞の裏に坐して、アラ、ン曲を聽きしに發したるなからんや。若然らんには其文辭の悲壯沈痛なるは當然なり。

『東方大陸の末日は、既に以て落日を留むる能はざるか』、と云へる劈頭の一語を讀誦せば、全編五百五十三頁『而して此時に當りて滅亡するか、獨立するか』と云へる結果の一語に至るまで、其如何なるインスピレーションに感憤して此大著（當今の群小著書に比して）成したるかを知らん。

氏の描きたる地理部に在りては、白頭山系あり、其背系を敍し其西南系を論じ、之に腹背せる山野村郡を敍し、其交通の便否を記す。六大江あり、豆滿、洛東、鴨綠、大同、漢江の五江に加ふるに錦江を以てし、而して其流域に關する住民の種類、貧富、其在する交通の眼目、其政治的、社會的、及商業的の結果、文明の由來を論ず。其他中原、三南あり、仁川、釜山、元山の三港を以て附錄とす。頗る詳密なるものあり、之を行ろに評欧的文辭を以てす。其社會部には、社會の階落あり、王室、貴族、常民、奴隸、部城、村落より巫女淫祠、佛教、儒教に至るまで、悲風落寞の光景を寫さゞるなし論ずる所の社會情態、政治制度、皆悲涙の中に躍動たる希望の光明を提へんとするにあるが如く、思はず半島人民の沈淪を慨せしむるに至る。歷史部に在りては七朝史の概要あり、古朝鮮、東方の家、長國、三國分立、南北人の消長を略叙し近世史に入つては、大院君の執政より、外戚と大院君の關係を論じ、十七年の變より、東方が瀋屏に到り、獨立扶植より最近の十一日事件及日露の協定に及ぶ。其日本と關係ある所に至つては明治政府の失敗を指摘して餘蘊なし。最後に東亞に於ける朝鮮の歷史と位置とを論し、更に世界に於ける朝鮮を論ず、一氣阿成にして天馬空を驅けるが如し。想ふに著者先づ意成り、筆を下して、意氣斗牛を衝くの槪あるか。

著者の見に對して必ずしも同意し難き所ありと雖も、そは先づ他事として一般に評すれば本書の如き眞面目なる著述は近來稀に見る所なり。

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

勝海舟伯題字　弘松宣枝著

阪本龍馬

肖像並に手翰石版刷り入
定價拾五錢
郵稅四錢

●毎日許　弘松宣枝氏の筆に成り例の民友社より發兌す龍馬はそれ土佐人の最も完全したる典型ならん歟其辯舌の雄快は後藤象次郎に類して意志の堅剛これに過ぎ僅々十年に滿たざる公生涯には幾多の波瀾あり幾多の曲折あり悲を曰へば悲の極喜を曰へば喜の極を盡くし眞個快絶壯絶の歷史なり本書はこれを叙する簡にして要を得たり

●中央許　維新革命の當時に在つて西郷木戸と名を均くせし坂本龍馬氏の傳記なり氏の傳記嚮きに坂崎氏の汗血千里駒ありと雖も其小說体の結構雅致の故を以て多く婦幼の玩ぶに止まり他此偉人の爲に氣を吐く者少れに其事業性行漸く世人に忘れられんとするの時此著作を見る流麗有趣の筆能く當時の情勢と坂本氏の面目を描き得たり吾人は著者の勞を多とせずんばあらず

●敎育時論評　是れ明治維新の先導者、土佐の勤王家たる坂本龍馬の小傳なり。先づ土佐の勤王論より、山崎流の朱學によりて發育し、谷仁山によりて成長したるより說き起し、次に龍馬が少年時代靑年時代の摸樣を、當時の時勢と共に並せ寫し、次に土州の志士武市半平太、吉村寅太郎の生涯を略叙し、一轉して勝海舟と龍馬との關係を說き、再轉して薩の聯合、伏見の遭難を寫し、夫より海援隊、小倉の役、汽船の衝突、大政返上、最後、中岡愼太郎の人物を紹介し、遂に家庭に於ける龍馬、及其人物に至りて稿を終る。而して著者は、實に龍馬の近親に當れりと云ふ。讀者をして龍馬の一斑を知らしむるには遺憾なかるべし。

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

第一國民小說	定價十五錢　郵稅四錢
第二國民小說	定價十五錢　郵稅六錢
第三國民小說	定價十五錢　郵稅四錢
第四國民小說	定價十五錢　郵稅四錢
第五國民小說	定價二十錢　郵稅四錢
第六國民小說	定價十五錢　郵稅四錢
第七國民小說	定價十五錢　郵稅四錢
第八國民小說	定價十五錢　郵稅四錢

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價
一冊金五錢　郵稅五厘
半年(十二冊)前金五十錢　地方郵稅共金五十六錢
一年(廿四冊)同金一圓　共金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人　吉崎岡吉
編輯人　金子佐平

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治廿九年十一月廿五日發行

家庭雜誌第九拾號

目録



家庭雜誌第九拾號
（明治廿九年十一月二十五日發兌）

社説

武士道の墮落

甚だしいかな武士道の墮落せしや、年一年に紳士の品格は下落し那邊に止りや未だ知るべからず、今日の社會を通觀するに、自ら固信固守する所ある一部の人を除きては、吾人が祖先より傳來せし武士根性即ち紳士の品格なるものは、蕩然地を拂へり、吾人常に之を悲む。

近頃吾人は新聞紙の報ずる雜報を讀んで轉た紳士の品格及其家庭の品格の墮落を悲むを禁ずる能はず。

去十二日芝南佐久間町寄留衆議院守衞某の妻某女は其夫の不在に他より貰ひうけし某と稱する本年三歳になれる小兒が食事の際二粒三粒飯をば膝に落せしを怒り罵り、長煙管を振ひて眉間を打擊し泣々詫びる顔是もなき小兒をば亂擊尚ほ饜らず長火鉢の猫板を以て兒の脊を力を極めて二三擊を試みしが、兒は一聲悲鳴を擧げて死せるより判事、檢事出張して其死躰を檢せしに兒の顔、頭、手足、脊に傷及痣のなきところなく指は生爪を剝がし身躰中に火傷の痕あるは毎日線香の火を以て衝きしためなりといふ。

ア、何等の慘、何等の酷、吾人此記事を讀み半ばにして通讀に堪えざらしむ、而して其の惡鬼にもまされる妻女は曾つて諸々の地方を巡回して料理茶屋等に劣等の職業を爲せる半藝妓の如きものなりと、人情を解せず義理を知らず欺瞞嬌媚を事とせる婦人なれば小兒を慘殺せし事怪むに足らざれども、其夫たるもの家政を賤婦に委ねて安然たるこそ奇怪なれ。

先年も北海道にて裁判官某の妻、夫の甥たる少年を虐

殺したることあり、實に其妻は果然藝妓のなれの果にてありき。

虐殺の事豈獨り衆議院守衛某の家庭のみに限らんや、守衛は小吏のみ、かゝる賤婦を家庭に入るゝ愚あるも尚ほ恕すべし、然れども少くとも紳士と稱せらるべき敎育あり、品格あり名望ある家主に於て賤婦に家政を一任して恬として顧みざるもの往々耳目にするは寧其無頓着に驚かざるを得ず。

由來藝娼妓の賤婦は、品格ある家政、品格ある敎育、品格ある交際などは夢にだも見る能はず、僅に衣服の破綻すら繕ふ能はざるにあらずや、又彼等は平生人を欺瞞し人を愚弄するの習慣あるを以て普通の人情すら解し得ざるなり、人情を解し得ざるが故に小兒の愛情も解し得ず、小兒の虐殺別に怪むに足らず。

小兒虐殺、實にこれ一の出來事のみ、彼等の家庭の敗亂は、日々小新聞の好材料となり居るにあらずや、其主人たる人は自己に顧み世上に對して耻づる所なきか。

滔々たる世間幾多の紳士と稱せらるゝもの、劣等賤婦を娶りて耻づる所なきは、取も直さず自づから紳士の品格をば下落せしに依るなり。

維新前は武士はどこまでの武士の品格と躰面とを維持したり、少しく身分ある武士は演劇を觀るすら簾を卸して其品格と躰面を保ちしにあらずや、配偶は初婚を禮とし經婚の婦人をさへ厭ひしにあらずや、今や然らず、千百人の男子と昵近したる劣等婦人をば、直ちに入れて妻妾となし、毫も憚る處なきに至る、茲に至りて紳士の品格即ち武士道の墮落も極れりといふべし。

藝妓等が其風俗を壞亂せしは明治以來の事情に屬す、江戸時代に在ては藝妓は單に藝のみを賣りしを榮譽とせり、現今に至ては劣等賤婦等が藝娼妓となるは、所謂玉の輿に乘るべき學校の如く思ひ做して、賤業を營

むもの年々に増加し、所謂紳士なるもの、迎えて以て妻妾となすを耻とせず、以て身躰の一半とし、神聖なる家政を劣等賤婦に一任し、偶々家庭の敗德、敗亂世間に發表せられて、始めて後悔臍を噬むは、愚昧の絕頂と稱するの外辭なし、吾人は只武士道の年一年に墮落するを悲むのみ。

猫の聲

或家の母親が愛らしき四歳ばかりの小兒に英語の單語を教へ、

母「猫はキヤツトといふのだよ

兒「阿母さんなに、キヤ、なに

母「キヤツトだよ、キヤツト、能く覺ゐておいで

兒「キヤツト、キヤツトだれ

母「猫だから、其の猫の泣く聲を覺へておいでよ

兒「はい

其翌日復習をさせ、

母「坊や猫の名は

と問はれて小兒は一寸首を傾けて考へ

兒「ニヤツト

史談

百合と玉瀾

其の字生

余か友に吉野凌雲といふ人あり、書畫の嗜好尤も深く珍藏積んで山の如し、近頃門を叩きて喫茶甲を許し乙を批す、中に半切の絹本夕顏の花を描けるものあり、大雅堂が妻玉瀾女史の作る處、筆意溫雅にして我賞すべき辭を知らず、玆に於て我始めて知る名下虛なきを、歸來五六の書にあさり、此閨秀が傳をものし、併せて其母祇園の百合と語るべし。

時は是寶永年間の事なりけり、京の都にお穀と云る女あり、祇園祠前の華表に沿ふて葦簀張の茶肆を出し參詣人の足を休む、穀に一人の娘あり、百合といふ茜裾の衣を着けて客に接し茶菓を供す、性質怜悧にして

和歌をよくし手蹟美事に容亦揚れり、都人彼語り是傳へ、祇園の百合が名花に喧し、されば少年の子弟志を動かすもの一にして足らず、或は權を以て或は富を以て各其愛を買はんと欲す、されども百合は一も顧みる所なし、時に幕府士人の子に徳山某といふ者あり、才世の人に優れたり、今年青年二十二歳、事ありて落魄都門にさまよふ、百合一見して意氣相投じ遂に松蘿の誓をなす、百方苦心してこれを扶助し、輕暖膏粱一に欠く處なからしむ、厚情年を重ねて一女を擧けたり兩者これがために愈々睦しみ、最愛心を保育に盡せり此兒三歳に達せし春、徳山氏の使臣都に來りて、八方其踪跡を求め百合か家に於てこれを認め、久濶の辭述べ終りて扨いふやう、宗家嗣絶えて繼くべき人なし、玆に於て一族の方々相議して今や郎君をむかはしむなり、我等其命をうけて以來殆んど三旬、偏に其漠たるに疲れたり、今日にして逢ひまいらす、歡喜たとふべきものあるなし、急き東下あるべしと、輿馬輜重美を盡して一に稱へり、某今更にいたく喜び、直ちに東下すべきを使臣に諾し、共に／＼下るべき樣百合に語るこれも亦喜んで諾すべしと思ひしに思ひきや、妾の郎君に侍するもの、昨日今日の如くなりしも積んで早十年の永きに亘れり、さるを今にして一朝忽ちに相別るゝ、情切にして涙覺えす、愁然胸に迫まつて言ふべきものなし、嗚呼斯くまでに悲しきをも忍びなんこそ實に郎君の御身のためなり、落魄十年時を得て今歸りたまふの砌り、白晝婦女を携へ行く、善惡なき人の口々如何んぞこれを許せであるべき、殊に妾は路傍の楊柳園生に移さるべき品にあらず、願くは郎君獨り東下これあるべし、折柄の氣節沿道恙なく御着あれ、芽出度家を繼ぎ給はゞ別に良閨を迎へたまひ、琴瑟和合家門隆盛の事を謀りたまへ、山海百餘の道を隔て玆にあるも一意唯其事を神に祈らんと、更に隨行を肯かふ色な

し、某これにいたく失望なし、强いても誘ひ歸らんとて、吾れの斯くも漂泊してたよるべき地もなきなるに、餓渇凍餒一つも感せず、幸ひに今日に至りつるもの一つに御身の力による、されば今よりして僅か其積日の勞にも報ひ、且つは相愛ともに〱其榮を別たん届けても隨ひ下るべし、殊に又人富貴にしてそのかみ糟糠の妻を捨つ、余の心に忍びざる處なり、樣々に辭を盡くしてこれを諭すも更に〱應ぜざれば今はとて又百合に打むかひ、されば詮なし我獨にて下るべし、生む處の女御身と思ふて攜へゆかん、そを否む事はあらざるべしと語りしかば、百合又辭していひける樣、郎君新人をむかへたまはゞ、日ならずして御子生れたまふべし、なれば決して事を欠かず、如何せん妾のみは一旦玆に永く相別る節操を守りて又とは他人に見みへさるべし、孤閨寂しき燈を剪りて半夜心を慰むもの、されば此兒にあらで何ぞや、撫養これを見る猶君を見るが如くなさん、さるを御詞の如く攜へかへられ了らんか、憂き日寂しき夜それ何によりて送くるべき明かすべき、と聞くまゝに某いたく心を察し、いふがまに〱遂に母子を措て去れり。

それよりは百合かたく操を守りて、假りにも浮きたる事とてなく、一意幼兒を撫育して唯々其成長をのみ待てり、漸々物を解すに至れば日毎〱諫めていふ、御身が父といふ人は世に優れし士人なり、されば御身決して是を忘るゝことなく、其身をいたく珍惜して更に輕視することなかれ、若し誤まつ事のあればこれ一つに御身ばかりの耻にあらず、母の耻なりひいては東なる父君が名にも亦關はるべし、ゆめ〱忘るゝ事なかれと且つ戒め且つ敎ゆ、既に長じては天禀の才氣母の指導にいよ〱顯はれ、流石は百合が娘なりと都門再び其名を傳ふ、百合は如何にもして佳婿兒が身を托すに足らんものを撰び、一つは我身も積年の勞を息めん

と百方すれども適意の人なし、偶々池野貸盛なる者ありて東山のほとりに寓せり、人のために書畫を作つて自から給すれども貧にして或は足らず、人是を見て各々侮る、獨百合誠に奇とし、迎ふべき人是より他なしと遂に意を決して娘に娶はす、即ち大雅堂これなり、女これより夫に習ふて畫をよくす、終日對座紙を展べ墨を磨し、琴酒ともに樂んで釜甑塵積むも亦意となさず、百合これにいたく滿足して、年ならず遂に瞑せり
大雅堂の名いよ／＼揚かり妻も亦玉瀾と號して盛名更らに夫に讓らず、嬉々として赤貧ともに相睦しみ一衣互にかへて着す等實に畸中の畸人なり。

冷泉大納言大雅堂夫婦が名斯の如く高きを聞き、使してこれを召したまへり、家中の上下當時盛名ならぶものなき池野大雅殊に其妻玉瀾の脂粉盛粧して到るを見んと、各々朝未起よりそを待ちたり、やがて刻來りければ果して玉瀾夫に伴して來りたり、邊幅一つも飾ることなく、荊釵布裙一見八瀬大原の村女にかはらず、いづれも其素粧なるにいたく驚き、驚きと共に各々尤も敬服せり、御前に於て夫婦蘭菊の合作を造り、又一幅の山水大雅畫けば玉瀾贊す、納言其雙絶を嘆賞せられ日たくるまで打とけて語りたまへり。

是を初めとして時に其門に伺候して和歌を學べり、玉瀾一つも才に驕らず、師として納言に仕ふ一の欠なく、謹愼鄭重歳時の餽遺書に忘るところなかりき日ならずして上達名匠の中に數へらるゝまでに至れり。

嗚呼此母にして此女あり、此女にして此夫あり、三者ともに／＼揃ひも揃ふていふべきなし、伯鸞孟光は見ぬ唐土の昔語り我は日本の美術界近世の史上に於て斯る夫婦のありしを喜び、世界にこれを驕らんとす。

大雅堂には又た洒落なる逸事多く一々語り傳ふに足る、されど紙面の都合もあればそは又折を以ていふ時あるべし今は唯上の如くにて筆を擱く。

非文綴り終りて机に凭れば、夕顔の一幅惚として破壁にかゝる、知らず母子の香魂いづくにある。

讀者もし京の都に遊ぶ日あれば、洛東山色媚なるの邊此の閨秀の跡をたづねよ。

酒を戒む

酒は憂を忘れ、喜びをいたすものといへども、好めば過ぎやすく、過くればよからぬ事多し、飲む人忽ちに物に狂はしくなる故に酒の名を狂藥といふ、又これによりて禍出來るによりて禍泉とも名付く、目出たしと見る人すら、醉ぬれば本性くらみ、或は妄行の端となりて、あさましき事どもあり、殊に女の人に交り居て醉すさびたる、果ては髮亂り面さし出で、人目も憚からず、高らかに物いひ散らし、けうとく笑へる樣いと見苦しうたてし、管仲が詞に酒入りて舌出づと言へる樣に、醉るより言葉の咎をとり、大事をもらす事多ければ重く戒むべき事なり、女論語に酒は唯唇をだも濕ほすべからずといへり、女の酒のますとて事足らぬ樣やある、いたく戒めてふつと飲まさるぞよき、暫しが程の樂みに、後の永き悔をとらめや

（姫鏡）

文藝

琵琶の波枕

はなぶさ

京都西六條、本願寺の郭内にて、大鼓臺とし云へば、人も知つたる時の大鼓なり。高さ五六間、構内又七八間、以前は明六ツより打初め、二六時中に刻々を、報したりと。今も猶、四六に時を敲て、此の界隈にては、午砲よりも重寶なり。臺下柵を結び、區を畫し昔日は寺領の胥徒を、繋いたる囹圄なりしとかや。されば今尚、此の一圓にて、悪徒を指して、大鼓臺とは呼ふなる。

今しも花屋町を出て、此の臺下に差し懸る、一個りの若猩あり、唐綫の縞細なるを短く羽織り。黒髮に香水の、滴らんばかり濡らせ、化裝せしやと、見過ふ程、

磨ける顔、小間下駄輕く操り、一個の箱を脇挾み、どんと打だす大鼓に驚きしか、一寸臺の方を顧向き、三ツと數へ終る間に、寺領の北門を通り拔け、左り手の四間目、吉村と標札したる、由緒ある一構を見て、莞爾み、勝手に廻り、低く然しながら通る聲にて「へー、御免なさい、髮結て厶ります、今日は、御用は」と呼ふに内には遽しき跫音して、障子を開け、ニユツト衝出す顏は下女の梅、梅は一寸と笑顏して「オヤ熊さん、こんじゆ、ま、どうして、四五日、見へなかつたね」之がと、一寸と小指を出し小聲になり「どの位い待つてたか知りあしないよ、まゝ御はいり、」と誘て奥へ斯くと通ず。

吉村と云ふは、本山にて巾きゝのものにて、毎日勤たる重役なり。眷族は夫婦二組と、三つになる男子と、下女の梅となり。若夫婦とは、妻は家の子にて、老夫婦が手にも腹にも、たつた一粒の寳なり。尤も此の兄に當る、男子一人出來たれども、三歳の時、癇強くて死失がり、手懲の後の子なれば、別して父母の慈愛深く、蝶よ花よと、下にも置かず、無理强躾して、虫氣でも起したら、又しても悔まぬことと。人心地付かざる前より、かに斯と甘やかし、言がまゝの子煩惱は、母親のと、春は花見、秋は紅葉狩り、祭り正月の着飾り。ねだりは却て樂み、無理は倘興ありと、母親の自慢ばなし、他家の娘子の、見習いて、强訴事の好き手本なりし。夫と云ふは、先年父が氣入りにて、學寮より撰り取りして、双方故障なきまゝの養子婿、二りの中の三ツになる子が、眞丸に肥へ「ばゝちやん」と跤ひ懸る時は、有繫子煩惱の老母は、目を細くしての嬉しがり。老父も寄る年に、世事慵く、家督を渡して、此からが眞の、後生願ひと、只管喜び、一家の樂和、鶴龜萬歲、惡魔は此世に、なきものと信ぜられたり。

禍菑却て墻墉の内に在り。老母は獨り思に沈み、爭も

やとは思へど、頃日はどうも、變で堪らず。あの結髪が、出入してより、丁度三月、此の二三日は分て、娘が何言ふても、落つかず、小供の髪直すとは、聞へたれど、若しもの事ありては、良人の顔、家の名折れ、婿に對しても、倘更濟まず。婿はあれ程、發明な人、何とも言はず、知らぬ風情しては居れど、何で此の間の消息を、知らずに在らふ。寧そ良人に打明けんか、老人の氣短かな質、何んなに怒り玉ふやも知れず、又口惜しがり玉ふを、見るのが氣の毒。さればとて憖に意見しても、娘が聞入れやふとも思はれず、何樣な返事を、言するやも知れず。あゝ可愛さに、小供の時の甘き躾は、其身の大毒、一家波瀾の基、皆己が惡ひのだ。其とも矢張己が僻目か知らん、祈天親の僻目で有れがし、と轉輾反側案じ煩ひ。何より髪結を、寄せつけぬが、上策ならん。と其とれなしに、梅に言含め、髪結の出入を謝斷りたり。

娘は母の留守を見計り、一寸清水の觀音樣へ、と子供を下女に托け置き、出たつきり、黄昏過ても歸り來ず。母はさてはと、氣が氣でならず。立つ坐つ、若し今にも良人の尋てなら、何と言繕はんか、と悶へ、内密使を遣つて、髪結の處を、尋ねて見れば。南牟三寳、此も兩三日前より、引越して行衞不明との注信、今更力なくて、打委れ、談合の相手もなくある間「娘は何處に」、と良人の辭に、何と返辭もなくて、胸轟き礑と引詰つてありしに、良人は「湯にでも、行つたのか、其にしても、飯も食はずに、何しとる」と氣付かぬ言葉其塲は免れても、母の若痛は段松葉、其夜、十時打ても歸らさるに、父は漸く不審立ち、「此迄つい、他家に長居したとは、ないが、何處へいつたんだ」、と最後の訊問に母は今更隱すにも隱されず。實は。と晝前清水へ、と云つばかりで、未だ歸らざると、這般の怪しきと共、打語るに、父は活つと逆上げ「何に娘れが不義したと

蓄生、親の顔に泥塗つた、殺しても足らぬ奴」、と髪逆立つて、恐ろしき權幕、母は失策つた、とは思へども斯ふなつては、仕方なく、何の路云わで濟まぬとなれば、氣を沈めさするが第一、と「そりや御尤ですが、索したら、見付からぬものでもありますまいから、此は情願私しに、御預ください」と云ふに。父は愈ゝ油を加へ、「馬鹿あ言へ、縱令居つたにしてからが、此樣な奴を、二度と自家に入るとが、出來るものか、そう貴樣迄が思ふから間違だ、一體貴樣が、子共の時から、餘り糞煩惱を、懸たからだ」、と息繼ながら「彼樣な道知らずい、一時經て、困難とか何とか言つて、便々と歸るものだ、其時決して入るゝなよ、」あゝ一家漸く睦ましく、此からか隱居して、樂なと思つたに、また苦勞をさせるのか、と愁然としてあるに、母も同じく大息す。

唐崎の松は、琵琶湖畔にあり、千年の綠を装ひ、盤屈龍蛇の蟠まるが如く、四邊丁餘の肢を下し、一枝急に走つて湖水を呑まんとす。湖面鏡の如く、風凪ぎ、一望十里の蒼浪を漂ふ。竹生島浪を劈て出で、白帆或は顯れ或は潛む、比叡山を脊ひ、生吹山に對し、片田の落雁、瀨田の輕橋、呼べば答へんとす、天然の美、罪惡の隱處とも思はれず、此松に連なり、數戶の村あり、通りよりは、稍入込みて、一宇の草屋あり、人の醉ふ、春の彌生に引越したる、夫婦住めり。夫は華美を好み、輕く言ひ、務めて粧ふと雖ども、品立たず、職人らしき處見ゆ、婦も同じく、華美なる風なれども何處にか、深窓に育つたらしき處あり、何を營むとはなしに、常に双方滿足らしく、舟を浮べるやら、山に杖ひくやら、何時も、睦じく二人して、何だらふとは此のわたりの人の疑問なりし。其も二月か三月にて。其後は何か爭でも、あつた如く、男は日々、獨り出行き、二三日も歸らぬと、多かりし、次第に貯へも、減

つたらしく見へ、女は縫針に、渡世の路をあせれども、男は何も爲すとては無く、歸る時は醉氣の躰に見ゆ。斯くして夏去り冬來り、十二月の下旬と云ふに、女は産月に身重くて、四五日も惱みてあるに、男は十日計りも歸り來らず、二十四日の夕なりし、女か産氣立つて、唸るに、隣家の婆聞兼て、漸く加勢して産落したるは女の子なりし。苦痛も少し止みすや〳〵と、眠るを見て、婆は安心して、赤兒をそつと襤褸に包みて寢かし己は自家に歸る。婆に引違へて、入り來るは男にて、此家の主人なりし、十分參つたのか、顏眞紅にして蹌踉として、入り來るに、家内はひつそり寢たのかスー〳〵、入の息引く音のみ、男は戶口より「コラもし寢やあがつたのか、オレが歸つたのも知らず、なんだつて、今頃から寢やあがるんだ」、とけたたましき足音に、産婦は目を覺し「オヤ御歸り、此間は何して、御歸りなかつた」「默まれ主人が、他處に行くに、何じとつたつて依頼わぬ世話だ、其より速に一本つけろ」とどつかと坐す、「そりやあ、あんまりです、私しや四五日前より、此れに苦められ、今漸く産んだばかり、其も隣の、婆さんの加勢にて、やつとのこと」「べらんめー産でも山でも、そつちの勝手だ、己の子ぢやあなへし、一躰きさまと、此中へ來たのは、きさまを、看病せん爲ぢやねへぞ、母ん處へいつて、臍栗でも、掠て來へと云つても、行きゝれずに、くず〳〵してさ、態みろい」と云へど産後の苦み口惜さに、女は起きも得上からず、蒲團に嚙付、聲を惜まず泣くのみ、男はつッと立ち上り「此樣貧乏神に、用はねへ、」と座を蹈みならして、出で行かんとす、女は這いより縋付「何處へ御出る」と怨めしげに見やれば、何處へ行つたつて己の勝手だ、きさまの樣な、意氣地なしに、取つ付かれて、たまるもんか、此れから、東京へでも、行て、又旨へ汁でも吸ふんだ、巫山戯たまねをしやあがるな

と、髻執つて、ウンと投付げ、後をも見ずして出て丶行く、音に驚き嬰兒は、オギヤー〱、「オー母だ」、と取り付く女、燈消へて苦月窓より落ち、諳淡として凄し。

「御母さん〱」と、ホト〱と叩くも、細き聲、日破に漏る丶許りなり。吉村の老母、淋しくて、獨り物案じに沈みし折から、ふと聞付て、ても今のは、善ふ似た聲、もしやと思へど、又思返して、矢張り迷ひの幻ならむ、と又顚頭き、火鉢の灰を掻きまはす、「阿母さん」と又呼ぶは、確かに娘、母は飛立つ嬉しさ、艮人も婿も居ず、梅は便に出でたる後、好き潮と。振われる丶足蹈しめ、庭の簀戸を、はつと開く。娘は思はず馳せ寄り縋付きたれど、愧しさ悲しさに、未だ一言も得へ言はず、浩處に生憎や、樂しき家もあると見へ、彈き出すは『天罰の、神佛にも見離され、定めて落果て、おろうとは思つたれど、是は又あんまりきつい、落果様』、母は手燭に透し、眺むれば、此の寒天に羽織も着ず、薄綿の布子一枚、細帯にぐる〱と、抱きたるは、赤兒らしく、みすぼらしき風情、母は目暮れ胸さく思、「えー厭まし〱しい、隣家の慰み、だして御まへの其風俗は、何んだへ」、と云われて、今更躊躇せしが、「どうぞ、御免なすつて下さいませ、實にお愧かしいとですが、此家を出まして、初めの内は面白く、何も分らず浮々と、暮して二月三月經つ內、懷中も寒しくなり、梁れは次第に邪見になり、見限つて立限き私はとふとふ、こんなになりさがりました」『父上や母様の、御氣に背きし報ひにて、二世の夫にも引わかれ、二人か中の』「コレ此の子はねへ産て未だ十日にもならぬものですが、情願此を御預りなすつて、下さりませ、私一人は何樣でもなりますけれど、此子が居ては何うも方が付ませぬ」、どうか、御慈悲と手を合すれば、母は瞬き「おまへがなくなつて、何樣に苦勞し

たか、志れないや志ないよ、おまへはあゝ志ていつたからにやあ、もう、子でもなんでもない」、『そりや、思ひ切ておりまする、御屋敷の軒迄も、來られる身ではなけれども『どふぞ、此子ばかりを』、と云ふ内、人の氣合してけるに、母は忙はしく内に入り、手早く綿入を、取り出し、又紙に撚つて少しの金を與へ、其子はどふでも、するから、御父様に見付からぬ内、早く〳〵」と追立てられ、盡きに御慈悲と、押戴き見れば茶縞の銘線に、繻子の帶迄添られて、是が母の見納かと、盡きぬ名殘を思ひ切切石をそつと裏道へ、立出づるに、又も隣りに聞ふるは、『袖萩か娘に見せじと突込む懷劍』をヒシト胸に應へて「嗚呼どふしても生ては居られまい」

御芽出度〳〵、と正月二日の松の内、會ふ人宛に祝ふ辭、訝しき女が、吉村家を去つて、三日目の朝、大坂朝日新聞に、女の投身と題して『唐崎の松の邊り、去る大晦日に女の投水ありし、年は二十二三、色白く眉目好く、賤しからぬ風俗、茶縞の銘線に、繻子の帶、未だ何處のものとも知れず、必ず深き事情ばしあらん痛まし』と皆笑止と見やる内にも、吉村の老母のみは芽目度正月の五日間も、垂れ込めて人に逢はざりしと云ふ。

鍋燒饂飩

桐廼舍

鍋燒饂飩は神か佛か、否我恩人なり我師なり、さはいへ我これを好にもあらず喰するにもあらず、我はいにしへの道を慕ひて夜毎に物の書など讀さしつゝ、あるに知らず〳〵更行てやゝ一時二時を聞に、おのづから心ゆるみて眠氣さす折〳〵忽に呼覺すものはいつも鍋燒饂飩の聲なり。嗚呼此鍋燒饂飩は我怠りをいさむるのみにあらず。寒さをわぶる夜商人を暖めから車引て歸

る車夫の腹を肥し、また花柳の巷にいりては御茶挽娼妓の戀人となり下宿屋の窓に立よりては貧書生の親友となる、猶其他一々かぞへあげなばあたら紙上を費すのおそれあれば只三ッ四ッを志るしゝのみ。實に世渡りの道はさま〴〵なれど鍋燒饂飩の勤ほど苦しきものはあらじ。其身は小き鍋の中に煮らるゝを冬知らずよと人は思へど、時雨降夜も木枯吹すさふ夜も此聲の絕る事なし此聲を聞けば丸木の枕せしてふ唐人もものかは。まして我如夜着ひきかつきて文机によりつゝあらば幾夜明すとも何にかわらん。と思ひおこして明日と思ひし事も終に爲し得る事あり、されば學校などに通ひ給ふ人々はさらなり。何事にも夜をこめて學の道をいそしみたまふ君たちは。皆此鍋燒饂飩の諫を聞たまへ我も願はくは來世は鍋燒饂飩となりて。世の人々によろこばれ又怠りを諫はげまし今の恩に報ぜんと思へば。常に聞馴し鍋燒饂飩の聲も優曇華の花得たる心地して嬉しきまゝに

　　賤の男か鍋に煮らるゝ食物も
　　われうとんけの花とめてゝむ

と口すさびたるに傍に伏したる夢子とよべる童むく〳〵と蠢て。さなのたまひそ鍋燒饂飩は晝は寐てのみあるをと。いと寐ほれたる聲して詰るもをかしわらいへの心にはさもこそと。我はひた負にまけて口をつくみしか凡いきとしいけるもの。木草にいたるまで寐ぬものあらむや。我は只其怠るなきを愛るのみと獨吟ぬるも夢かはた現か

雲の峯（上）

三　鷹子

萬づ心と齟齬して前途唯茫々、八面盡く暗憺として光明の我れを照らすものなく、霜氣骨に徹す嚴冬の寒き夜半には、栲衾の薄きをかこち、黃金鎔くる九夏三伏

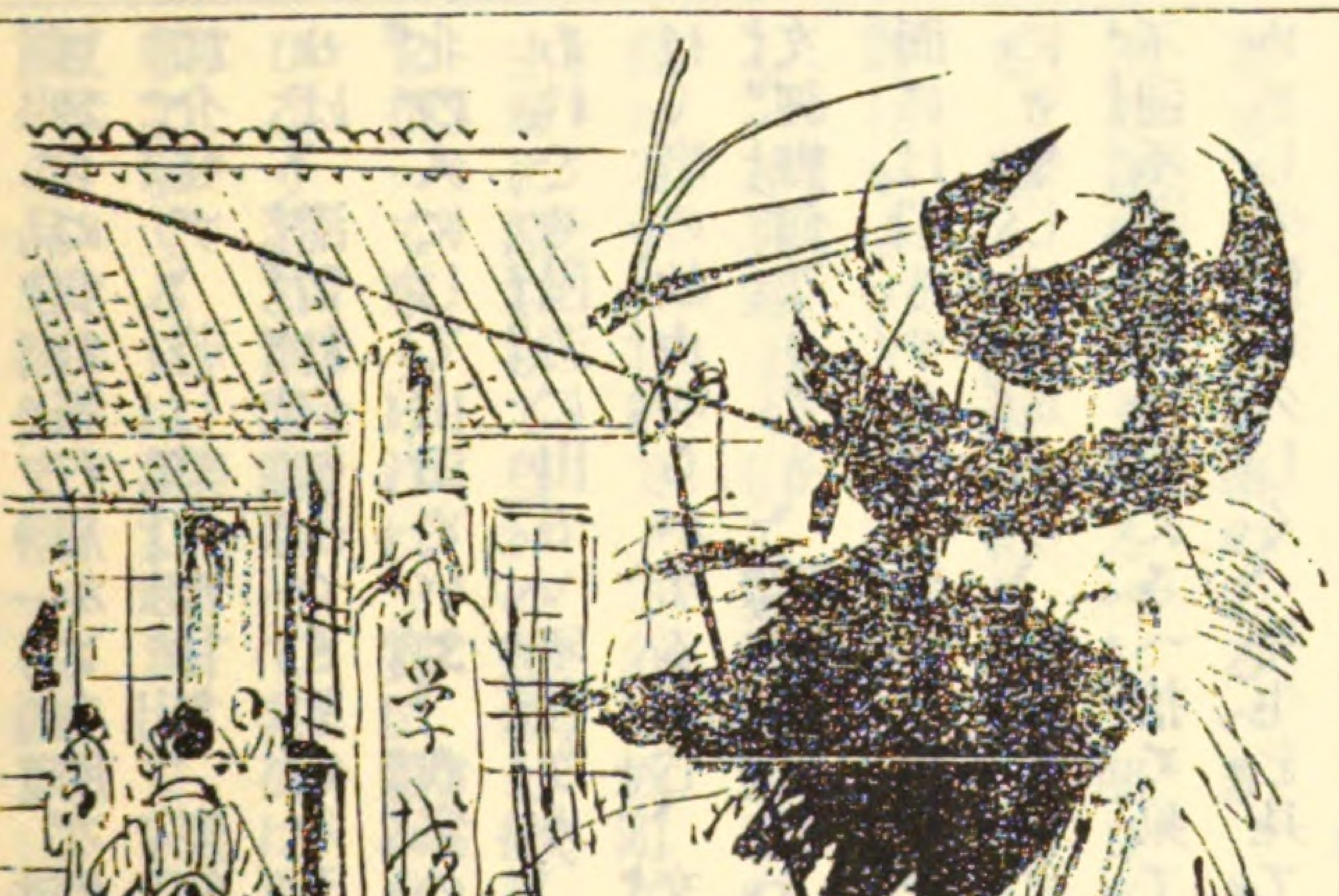
の暑き日には、緑蔭青々の夢を羨やみ、誠に孤行介立廣き天地に跼蹐して、數ふれは放浪茲に早十年、齡は而立に近きも、身は行水の行衛を知らず、蓬髮垢面にして肩摩轂擊の巷にさまよひ、弊衣汚袴にして人に指さゝる時は、玉敷の都もうたゝ住むに住憂くして、誠に東路の旅の心のいぶせさに、戀しさは增す故鄕の空かへらんと欲すれは男子苟くもと放言なして出にし時の耻かしく、進退こゝに谷まつて如何ともするに由なく、斯る時にこそ人は狂し或は死す、我か身にして我か身の所置如何にすべきや更に知らず、願ふはよきに計らひたまへと、艱難の中にも常に行きかひ、其事となく打解け語ふ淸水淸とて、花に名高き小金井の里より出で、今は或省の小官に衣食する男に語れば、さればなり斯くも親しくす御身のこと、如何にもと心に思はさる日とてはなく、樣々に胸を焦かすも知りたまふ如き我が身の上、數にもあらぬ薄給小祿に一家を立てゝ眷族を養ふ今の境界、賴まるゝ人の杖とも又は柱ともなり能はさることの切なさは、去る古への物語、懷の鳥を救へ得さりし燕の太子が思ひにもまして、いと〳〵苦きなり、さればとてひた忌なみに忌むはなさゝる處茲に一つの相談あり、君にしてそを引受け玉ひなば、いともかたきにあらざるなり、そは外の事にもあず、染谷村とて余が鄕里よりは僅かに一里を離るゝ地に重代の國手橋本在京といふ人あり、近邊に知れし豪家にて性質甚た義俠に富み尤も遠來の人を愛す、さればにや、或は二三又五六と、風來の書生常に絕えず、余もかつて家にありし日は常にゆきかひ、殊の外に親しくせり、我れ彼の人に添書せんに、君いかて行き玉はずや、必ず歡んで迎ふべし、暫く其人の許に寄食し相應なるたつきを求め玉ふべし、元よりもあまざかる鄙にしあれば、いとゞ不自由勝にして甚はだ興なき地なりといへども、所謂朴訥にして仁に近き田舍人はな

かく〳〵に頼もしく、夢々浮薄なる都の人の比にあらず尺蠖の暫し縮めるはやがて伸ひんが爲なるべし、小學の教師にてもあれ又は役場の書記にてもあれ、彼地にてそれに月日を送りむかへ、その内に多少の貯金ともなし、再び京に出て身を立てたまへ、我れは又茲にありて悠々君がために地を探さん、手立て此外に又あるべからず、決し玉へ〳〵と進むる傍へより妻さへも亦言を添へて説きければ、梧一も大に滿足の色をなして是をうけがひ、今更にいふも中々に艶めけども、思ふか故にこそ申すなり、そも君と我か身、山海數十の驛を越えて生れし身の、何とてかくも親しく交はり、六親にも勝る様々の厄介をうくることの難有きまで忝なく、禮すべきの言もなし、尙ほ此上にも顧み玉はれあはれ行先の永き月日、少しだも身の立居定まりなば萬分の報恩なすべき時のなくてあらんや、左なり左なり大ひに左なり、恩といはん程にもなければ元より報をうけん筈のあるなし、されども我はひたすらに、のたまふ如く一日も早く君の立身まし〳〵て、余を又顧み玉はんことを願ふなり、さればいよ〳〵行き玉ふやなどて行かざる事のあるべき、その橋本先生に宛て、例の添書をたまはるべし、明日にもいよ〳〵出立せんと、聞くや淸水はにこやかに答ふる様、されば下宿の方はいよ〳〵今日を限りにして、一夜は余か家に明かし、早朝茲より出て玉へ、至らぬ隈なき御厚情されば然かなすべしとて、下谷車坂町なる下宿に歸り、此由主婦に語らひて些かの殘金を拂ひ、小さき風呂敷の包を携へて來りければ、實に賴みある人の心、門出の祝ひなりとて酒肴調なべて其夜は更くるまでも打語らひ頓て明くる日は疾く起き出てゝ、懇切なる添書の外に餞別の品を添へて梧一に渡し、折しも時候よからねば專一に身をいたはり玉へ、遊子病に臥する程世にあつらき事なかるべし、されども田舍は都と違ひ空氣新鮮

にして病の種もいと〻少なし、落つき玉ひなば直ちに知らせ玉ふべし、今日こそはせめて新宿へまでも送りたけど、勤めある身の心に任かせず、是にてさらば別る〻なり、手紙の内に委したれども、余よりも宜しくと橋本先生に傳へ玉へ、仰せ一々承はる、早出立たんと、妻にもいと〻事永く、謝意述盡くしてこ〻を出て新宿より汽車に乘れば時を移さず、彼の地の停車塲に達したり、茶屋より車を雇ふて急ぎしに、橋本の家に達しけるは其日の十二時過なりけり。

唯見る瓦葺きの長屋門、搆へ誠にいかめしく、冲天の老杉四面を圍める其中に、尨大なる二階造りの一棟、毅然として立てり、土藏穀倉薪小屋、或は物置など種々の建物、前後左右に相列なり、四隣屈指の豪家とは問はでも知るき住居なり、内玄關に入りて其意を通じ、取次の人に添書を渡しければ頓て奥の間に案内されたり、肥大半白の老紳士、我こそは橋本左京なり、清水氏の添書讀み終りて委細了承致したり、都とは事變はり事足らぬ僻地なるか上に、且つや出入の繁くして手も足らぬ我か家行屆かさる勝なれども、そを一つも意に介せず、若し菜食に甘じ、麥飯豆汁を以て足れりとせば、滯留如何に永くとも心のま〻なり、是こそは東北の人にして山田といふ、我家の客なり、猶外に二人あれとも漫遊に出で〻不在なり、萬つ此人に問ひたまはゞ事の故由明らかなるべし、文庫藏する所の書は詩文經書何なりとも、隨意御覽ありて妨けなし、と初對面には似もやらず、赤心を腹中に入る〻の言、思ひしにもまして滿足せり、何分ともに宜敷賴みまいらする不迷不遇の身は親にさへ捨て果てられたり、今日を初めとして爾來久しく、先生を見て父と思はんに、我を子とし見て憐み玉へ、犬馬の勞も亦敢て辭する處にあらずと、感激の色を面に顯はし、ひた賴みに賴みければ、及ばん限り盡すべし、まては海路の日もありなん

七顛八倒行路の難は人世の常態何狀心を屈すべき、余も亦這般の辛酸をなめて今日あり、青年君か如き人の爲に或は參考の一ともならん、暇あれば語るべし、勞れてやおはさん、打くつろきて休み玉へと山田に命しそが書生部屋に伴なはせり、其日も夕飯も濟みし頃、令閨にも逢ふて蔦づを賴み、それよりは日毎々々、或は藥局に出て、草根木皮の藥を剪り、又は寫字筆耕の勞に伏して、今日明日と送り迎ふる內、早其年も秋とぞなりぬ、或人梧一を書齋に呼び、御身こゝに來玉ひてより最早六ヶ月を經過せり、數ふれば是一年の半、今にして御身に計るべき事あり、昨日しも此村の或ものゝ共、我が方に來りていふやう、小學の課程を終りたるもの、進んでは中學に入れんこと中々難し、さればとて其まゝに廢學させんも亦意に滿たず、とやかくやと思ふのみにして事整はさりしが、今や君の來たりしことこそ幸ひなり、願ふは學校の雇となり課程終へて後、是等の望を足さんとす、此旨先生よりよきにすゝめたまへとて我を懇々たのみて歸れり、校長といふも



のありといへども、杓子定木の敎育をうけて、やゝも

尋常師範を卒業せしもの、本より是はいふに足らず、村民の爲め又は學問のために屈し難き節を屈して、暫くは彼れが下について兒童を敎へたまはんこと、我はよき樣に思ふなり、衣食住は殘らず我が家に於て是を辨せん、日々玆より通ひたまへ、されば俸給は殘らず存せん、斯くて兩三年もおはしなば、蓄財難きにあらざるべし、然る後そを以て京に出たまひなば、是ぞ誠に獨立獨行、他人の鼻息を覗はずとも思ふがまゝに事なるべし、さりとて異存あれば心置なく、語り玉へ余に於てそを咎むべきにあらざればと語り終りて莞爾たり、遠來の孤客初めての日に申せし如く、一にも二にも唯先生が言のまゝなり、先生の意はやがて余が遵奉すべきたとへば憲法の如きものなり、如何なる事にても何條かへす言のあるべき、況んや唯一時のためのみならず、行末の荒增まで至らざる隈なき御意、身にとりて又なき幸運誠に立身の機會來れり、のたまふが如くいたすべし、若干の蓄財をもなし又出京の時もあれば、是一身の爲のみならず、親しき淸水にも謝すべき事あり、よきに計らひたまへと答ふ、早速の承諾余に於ても滿足せりとて其旨を賴みし人に通じければ、いづれも大ひに喜びて、其次きの月の初めより、梧一小學校へ通勤せり。

女流の俳句

なにがし撰

秋季十二句

朝露に塗下駄くもる小道かな　たみ女
月琴の轉手に似たる蜻蛉哉　みね女
行秋の人もかよはぬ朱雀道　龍子
かあちやんや晩に燈籠かはろれゑ　糸女
葛の葉のあちらむいたるあした哉　季子
虫なくや明日は袷を仕立つべく　喜代
日表や鉢植のはぜ紅葉しぬ　春女
美しく裾に染出す花野かな　壽子
白菊や名香かほる奥座敷　町女

秋風の衣桁に古き浴衣かな　久女

旅籠屋の床にれつかぬ夜永哉　照女

蕎麥の花仄に白き夜明かな　蓊子

談叢

勇ましき孝子（二）

松ヶ枝女史

（三）

カチアの奴隷市塲はいつもよいギリシヤ人が賣られるといふので誠に評判の處でしたからトルコの各地方から絶えず商人が集つてそこに賣らるゝキリスト教徒をは何か獸の競賣でもするやうに無慘な取扱ひして賣買いたしました

買手等は今や冷淡な風躰でこの慣れなギリシヤ人の家族を見ましたが大抵は皆蒼ざめた傷負ひのメサロスを卑しめました

中に一人の商人は暫時この傷負の男と妻とを打ち見て居りましたが切りと腕や足など吟味してその代價を聞きますると憎く〳〵しげに笑ひ出しまして、「何、此奴はその半分ほどの價値もありはしない、病氣で弱つたあげくに手負だ、二週りも經たぬに失せるかも知れん彼奴、買つちや危險だ」

「フン」、と奴隷の賣手はあしらつて「彼はまだ人間の壯りの年です、もし注意して遣りさいすれあ直き愈えましよふ、お買ひなさい、市塲中、この上の代物はありません」

商人は横柄に頸掉つて行き去ろふとしましたが、賣手は無理に腕を捉へて引き止めました、「繼めてお取りなさい、貴君、賣買の約定のみでもよふムいます」商人は躊躇して暫時吟味するやうな顔付きで憐れなメサロスと不幸なヘレナとを見つめてありましたが母の脇にすがり付てその衣に顔を隠しつ泣て居つた不憫なるフ—

エレブには氣が付かぬ樣子でした、

「それじや二十圓で男と女とを取りましやうが、子供は要りません……何の役にも立たぬから……捨てゝしまへ！」

胸も張り烈けなん心地して賣手の答を待つて居る憐れの母は四肢悉く慄ひながら鬼の心も溶けそうな愛憐の樣子もてそが最愛の子をしかと胸に抱きしめましたメサロスは妻の傍に寄り添ふて恰も決して離れはせぬといふ風に妻とその子を自分の腕にかゝへました

然かし心なきトルコは商人から一圓二圓多く剝ぎ取ろうが爲め母の歎きも父の苦痛も聊か氣には留めません

「否、三人一所に四十圓で上げましやう、一毛も引けません、彼等は二倍の價値があるのですからもし貴君がお求にならぬなら、誰か他の人に渡しましやう」

「然かし子供をどうされよう」と商人は怒つて申ました

「最後の掛合だ子供なしに三十二圓で買ふ」

「どうぞお情けに」と不幸の母は叫びました「あなたは裕富でお出でゞすどうぞもう八圓拂ふて子供を一所に買ふて下さいもし子供に情けをかけて下さるなら私共はあなたの爲めに二倍の勞力も厭ひませんどうぞ悲んで居る兩親と不憫な子を憐んで下さい」、

慘酷な商人は恐ろしくも憐れな母を睨めつけて何の答も致さばこそ冷淡にも振り向ひて「早く決定なさい、親だけ三十二圓、一毛も增しません」と奴隸の賣手に申ました、

メサロスは起ち上つて無慘な商人の足許に伏して懇願しました「御主人どうぞ不幸な家族を憐んで下さい」といふ聲は實に非歎の最高の音調でした「私の手足を御覽なさい直きに強くなりましやう私は實に奴僕中の最も忠實勤勉な者として事ひましやう、たゞどうぞ子供を憐んで下さい、私共を離さじに置て下さい、手の皮がむけて指から血の出る迄も働きましやう」、

メサロスは答は受けずに蹴られました蹴られて地に仆れましたがトルコ人は再び賣手に尋ねました「最後の掛合です、三十二圓拂ひましやう、早く躊躇しちや居られぬ」

賣手の答ふる前にメサロスは再び無慘なトルコの足下に身を伏せて悲痛と失望とに叫びました「お聞きなさい、もし子供を付けずにお買ひなさるなら必ず神の咀が來て禍に罹りなさるでしやう兩親が悲しい余りに死んで仕舞ふたっあなたの金は無益になるでしやう」

「クレスチヤンの犬！もう一度言ふて見ろ打ち仆すぞ、饑飢と鞭が直きに悲みを忘れさすだろふ、して、これ、賣るのか賣らぬのか」

「然かし子供の仔末に」と賣手は申ました、

「海に捨てるか殺して仕舞へ」、とはトルコの無情な答でした、

「乃公にあ子供など必要はない、早くおきめなさいそうでなけれあ他の處で買ひましやう何、奴隷は幾何もある」、

商人が決定したらしい風を見て取つた賣手は俄かに

「じや、二人をお取りなさい小狗は誰でも好きなものが携れて行けばよい、」

愛兒を胸に抱きしめて聞て居つた母親は賣手の答の終るやいなキヤッと叫んで絶え入りましたメサロスは悲歎に沈みその妻の蒼白い顔の上に熱涙を流しつゝ無言で坐つて居りましたがフェレブは泣てその小さな手を揉んで苦しんで居ります

「今だ母親が呼吸の復ひらぬうちに早く子供を片附けなさい、早くしなければあ……」

怖ろしい容態で嚇しかける商人の權幕に恐れて賣手は忽ち泣き叫ぶ兒童を引き捕へて高く空中に投げ遣りました、兒童が群衆の中に落ちた時母は蘇生して切りにフェレブ、フェレブと呼びましたが何の答も聞えませ

んメサロスは群衆の中に自分の愛兒を見出さうとしましたが賣手の手に忽ち地に打ち仆されました、彼の新主人は僕に命じてその新らしい奴隷に鏈をかけさせました、

メサロス夫妻は今や涙も涸れ果てゝよした蒼ざめて鏈に繋がれて同情もないたゞ嘲り愚弄して居る雜沓の中を通り過ぎ將さに海邊に近いといふ時見慣れぬ一人の男がヘレナの傍に歩み寄つて手を握りました、失望なさるな、神はあなたのお子を憐み給ふた、悲歎の中にもせめて、これ丈けの慰藉はお持ちなさい、あなたのお子は私が養つて眞の親のやうに可愛がつて遣りましやう、

神はあなた方をお見捨てなさらない必ずやあなた方の最愛のお子に再會の期がありましやう」

ヘレナは歎きのうちにも頭を上げて優さしい情け深かそうな顔を見ました、微かな笑みが彼女の蒼ざめた顔ばせにおらせれました出來たならどんな嬉しい望みを與えてくれたその人に一言たりと語りもしましたろが情けなき奴隷等は急いで彼女を引き摺り去りましたたゞ行き過ぐる時この不思儀の恩人に聞えた言葉は「惠みの神よ、感謝す」のみでムいました、

一艘の舟は彼等を載せ去るの用意が整ふて數時間の後にはその住み慣れた島の家且つはその最愛の子より遥か〳〵の海路に乘り出でました、

御伽噺　おや〳〵馬（上）

五行子

扨今玆に說き出しますのは、むかし〳〵の御話です、或何とやらいふ家に一疋の馬が飼はれて居ました。若い時分には馳ける事もすぐれて早いし、力も強くつて中々役にたちますから、飼主が非常に可愛がりまして、蒔繪の鞍だの、金唐革の鐙だの、縮緬の手綱だの、銀

の轡だのと、色々樣々立派な物を買つてやり、又豆だの、新藁だの、糠だのと、毎日〳〵おいしい物をたべさせて、それは〳〵大事にしました。
ところが、だん〳〵と年がよつて力もへり、足も弱りて、とんと役にたゝなくなりましたから、前に買つて呉れた道具はみいんな取あげて仕舞ひ、旨い物とてはたべさせなく、ほんの破れた赤ケットゥを、たつた一枚着せたばかりで、まーづい〳〵芋のくさつたのだの、大根の尻尾だの、それも一日にたつた一度ッきりで、腹さん〴〵にはくれませぬから、馬は寒くて、ひだるくつて、くやしくつて、殘念で、こらえきれなく、たう〳〵不平をいだしました。
『へん、馬鹿〳〵しい、馬鹿〳〵しいたつて馬鹿〳〵しい、役にたつ間は、さん〴〵にいぢめて置いて、今日此頃の仕むけやう、人間つて奴は何てへ勝手なものだらう、かうなつてから氣をつけてもらをうと思へばこそ、若いうちに働いたのだ、芋の腐つたのだの、大根の尻尾だのなんかくれやあーがつて、あたいま〳〵しい旦那顏、何が旦那だいひよつとこめ、旦那ん今晩玄關番だ』
なぞといひたいまゝの、あくたいもくたい、つひには繩を食ひきりて、
『こんな處に長居は無用だ、畜生め、ざまあ見やあがれ』
と、あばよとも芝よともいはないで、しりくらい觀音、たう〳〵夜ぬけと出かけました。
さきによい所がある樣に、馬は中々威勢よく、はやり歌なんかうたひながら、其夜は夜ッぴと歩行きたうし、明方港のきれる時分に、お馴染の婆さんが、でつかい桃を拾ふた川の土手までやつてきました。
『何てへいひ心持だらう、臭い穢ない廐から見りや、百層倍も結搆だ、奇麗な水は流れて居るし、おはこ



だの、すつぱい〳〵だの旨い草が、これ見ろい、こんなに澤山生えてらあ、うれしいなあゝ、何は兎もあれ、まづ〳〵一服やらかしませう、をう、ほんにあつらへむきだ、煙草の火までちやあんとあらあ』言ひながら、煙管とり出して煙草をつめ、草の間にビカーリ〳〵光つて居る火へつきつけました、けれどもうまくつきませんから、『忌々しい、何といふ火つきがわりーいんだらう』とうつぶいてすいつけにゆきました、する



と其火が、

『ニヤにを、ふざけやがるんだい』と飛上りて馬の鼻へとびつきました、馬は非常にびつくりして、尻餅をつきましたが、やがて

『ふうーと、だしぬけに、鼻へなんか飛ひついて、ヒーンドイ事をするじやないか、一躰手前は何物じやい』

『ニヤニ物も糞もあるもんかい、おれの目玉へ煙管なんかつきつけやあがつて、あたこそぐつたい、全躰手前は盲かい』と

おきあがつて、ずーと高く脊伸びして、おまけに欠伸までしたのは、大きな〳〵虎猫でした、

『ヤアさうでしたか、虎さんでしたか、とんだそさうを致しました、まつぴら御免なさいまし』と

言別けする。

『さう言別けされて見ると、私しも誠に氣の毒になる、つい〳〵腹立まぎれに鼻へなんか飛ついて、だうです、創でも……いたみますかい』

『ナアニね、たうもないです、つまりわたしがわりーいのさ、眼玉へ煙管なんかをつゝけて、おまへさんの腹たてなすつたのはあたりまへさ、これがほんのお眼玉頂戴したといふのさ』

『ふゝゝゝゝゝ』

『ヒ、、、、、』

案外はやく打解けて、果ては笑となりました。

『さて虎さん、お前さんだうしてこんな處に』

『これについては色々な話があるのさ、出合はしたふせうに聞いておくんなさい、まあひどいじやありませんか、言語同断人非人といふのはまづ私しの飼主でしやうよ』

『へー……成……』

『わかい役に立つ間は、イヤ鼠をよく捕るの、イヤ糞

しがよいのさ、それは〳〵大事にして置きながら、此頃になつてからはイヤヘッツイへはいるの、お膳まわりをするのなんて此年よりを、いぢめちらすのさ』

『へ……成……』

『私しもまう此時だはね、少しはヘッついへはいつて樂もしたいし、お膳まわりでもして旨いものでもたべたいのさ、さう思へばこそ若い時分夜の目もねずに働いたのさ』

『さうですとも〳〵』

『然しね、小さな小猫の時分から、イヤまたゝびだの、イヤ鯡だのと、いろ〳〵氣をつけて呉れた昔の恩も重いから、大躰の事はがまんもするが』

『へー、なんですかい、紙袋に入れて、毛毬のかはりにでも仕やうといふのですかい』

『中々そんな事をところか、マー聞いておくんなさい、此んなものを置いても役に立たん、然し六乳で直がよいから、殺して皮はいで三味線屋へ賣るなんて』

顔を眞赤にして、歯をがり〳〵いはし、さも殘念さうに話しながら、くやしいと見へて、涙をペラ〳〵こぼして居ます、馬も我が身にひきべつして、

『イヤまう虎さん、何處も同じ秋の夕暮、なにもおまへさんばかりじやない』

なぐさめる樣なことをいふから、猫も不思儀さうに、

『さうおつしやれば、おまへさんにも』

『御同樣さ、あまり飼主がヒーンといから、たう〳〵夜拔さ』

『まて馬さん、おまへさん指づめ何處へ行かふと思ふて』

『何處と極まつた事もないが、まあ東京へでもいッて、かせいで見るつもりさ』

『それでは願つたり、叶つたり、丁度いゝつれじや、

だうか一處につれていてをくんなさいな」
『イヤまう、かう話わつて見れば、御同樣御互の身の上、兄弟と思つて中よくね」
『イヤ、ニヤニぶんよろしく願ひます」
『私こそ何分よろしく」
話はこゝでまとまつて、馬と猫とは東京さして出かけました。いろ〳〵な事を話しながら歩行く内に、思ひの外道はかどりて、其日の丁度十二時頃には、美しき小な峠の頂上まで來ました、猫は不斷家にばかり居て、こんな處通るのは全く今が初めてゝ、一向何も知らないから、馬にむかつて、
『此處は中々美い景色だか、何か名高處ですか」
『名高いとも〳〵、此處は名高いカチ〳〵山さ」
猫は毎晩〳〵飼主の婆さんが、孫に話してきかすのを、蒲團の上で聞いて居た、首噺を思ひ出して、
『それなればよく聞いて居ました、カチ〳〵山たゐ此處なんですか、イヽ處ですナア」
『アノ向ふの方に青く見える海が、狸が泥舟でやられたところさ」
『ヘー、ニヤルほどね」
感心して、其處らにすはつてやすんで居ると、向ふの方から一羽の雉が、これも亦かけ落と見へ妙な姿して出て來ました。
猫と馬とは是を見て、
『雉さんお一羽で何處へ」
聲かけました。聲かけられて雉は、
『ヤアこれは〳〵、お揃て何處へ」
いひながら馬と猫とならんで居る向ひ合せの木の株の上に腰かけました。
『どこへとて、東京へでもかせぎと思ふてす」
馬と猫と聲を併せて答へました。
『それでは丁度願つたり叶つたり」

『おまへさんもか〳〵』
『さうです、東京へかせぎにさ、飼主の野郎め、年よつていけないから、ソップにして食つて仕舞なんかいふから、パタ〳〵逃げ出して來たのさ』
『わたし等ばかりかと思へば、ほんに〳〵馬さんのいひなさつた通り、いづくも同じ秋の夕暮だ』
猫はいふた。
『ところが馬さんも、虎さんも、東京へ行て何せうといふ考です』
『仕方がないから、一生懸命私しはガタクリ馬車でもひき、ねへ虎さん』
『さうさ、私しは又どぶ鼠でも捕るつもりさ』
話す一々を聞いて雞は、
『ケ、、、、、』
笑ひましたが、やがて馬と猫とにむかひ、



『ガタクリ馬車をひいたり、どぶ鼠を捕つたりする位なら、何にも東京三界まで何かんでもよいじやないか、東京へまで行く位ならもつと樂な仕業を』

『仕たいとは思ひますが、何もこれといふて』
『ない事があるものか、馬さんも猫さんも樂で金の儲かる事があるじやないか』
いひますから、馬も猫ものりだして
『それは何です、どんな事です』
『淺草の公園か何處かで見せものになるのさ』
『見せ物て、何にさ』
『馬さんは碁盤乘り、そして私しが歌をうたうから虎さんは踊りなされ』
『踊れて何をさ』
『何をて、踊るのさ、傘さして下駄はいて絞りの浴衣きておどるのさ』
『そいつあ面白い、猫じや〱とおしやますがッてでしやう』
『左樣』
『それじや踊ります〱』

相談まとまつて、いよ〱東京へ出かけて行きました。これからだうなりますか、それは次の號です、二十五日だから、それまで待て居らつしやいよ。（未完）

武人兵を執つて戰ひ死を致して功を立つ、學者書を讀み言を立つ爲めに性命を隕すは固より其望む處なり（林春齋）

群書解題

土佐日記

欲東

日記とは即ち讀んで字の如く、日々の出來事を記せしものなり、或は日誌といひ又家乘日錄などの名あり、言葉は各異なるも實は一なり、政廳の日記は依て國家の樣を知るべく、個人の日記は依て其人の上を知るべし、誠に日記ほど大にしても小にしても、事の實を傳ふるものはあらざるなり。

我國の文壇に於て日記といふもの丶顯はれしは王朝の時代にあり、それより漸次相及ぼして種々樣々の日記出て、今は其名も盡しがたし、然して其上下古今數も限もなきうちにて世人尤も古しと信じ、且又文章尤も妙にして、片々たる冊子の大部なる源氏狹衣など丶相列らんと耻づる色なきもの紀貫之が土佐日記となす。

紀貫之が名は今更にいふも管なり、王朝時代第一流の歌人にして、和歌古今集の撰者なり、漢文は昔三品などの人々と列び稱されて今に傳ふ、然して和文の伎倆に至りては、古今集の序、大井川行幸和歌の序、ちかくはこ丶に解題する土佐日記によりて知るべし。

何故に此冊子土佐日記とは名づけたるぞ、貫之延長八年に土佐の守に任ぜられ、かしこにあるもの凡て六年、承平五年期滿ちて京に歸る時の日記なるが故なり、十二月廿一日の門出より、明る年の二月十六日京に達せしに至るまで、殆んど六十日にわたるの間、つれ〴〵なる舟中の摸樣はいふも更なり、泊り〳〵の浦の景色、其他百般のことがらを見るにつけ聞くにつけて一つも漏さず、又樣々の述懐喜しきにも悲しきにも決して餘すところなく、短簡にして然かも流麗なる文によりて記されたる、いづれも目前に見るが如く、一度これを讀まん時はうたゝ當時の貫之朝臣と膝を接したるの思ひあり。

其頃我國に於ては漢文いたく流行せり、然して其漢文といふも亦今日の漢文とは事違ひて、それは〳〵六つヶ敷く、四六騈儷躰などいふものなり、普通文字を解する人も容易には解し得ざるものなり、さるを其頃の人々は斯るものを書き得ることを人に驕り、我後れじと筆をふるひ、上下普通讀んで一の難きことなき至極便利なる和文を捨て丶顧みず、其樣たとへば過ぎし兩三年頃の英學者が横文字の文をかいて我は顔せし事にも似たり、貫之これを見ていたくうれひ、如何にも

して人々のかゝる迷ひをさましなんとて、漢文に秀でたる身の斯くは其時の流俗に習はず、世に人氣少なき和文を以て日記をものせり、されども亦婦人の文よといはれたる和文を書く、流石はいさゝか世の評を憚り、正々おのれが筆といはで、開巻第一

男もすといふ日記といふものを女もして見んとてするなり、それの年十二月あまり一日の日の戌の時に門出す、そのよしいさゝかものに書きつく、

と女の書きしが如くに書けり、これ此書に於て見る第一の事なり。

一篇を通じて和歌殆んど百首あり、いづれも皆朝臣の吟なり、諸子の夙とに知る、百人一首なる朝臣の歌

人はいざ心も知らず故郷の花ぞむかしの香に匂ける

といふは此日記中にあり、又阿部の仲麿が明州にてよみし歌も、古人の傳ふるが如く

天原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出し月かも

といふにはあらで

青海原ふりさけ見ば春日なる三笠の山に出し月かも

などの説もあり。

又其時代の舟子がうたひしいはゆる舟唄に、

春の野にてぞ音をばなく、わが薄にて手をきる〳〵つんだる菜を、親や貪るらん、姑や食ふらん、かへらや、よんべの菜を虚言をしておぎのりわざをして、錢も持て來ずおのれだに來ず

とあるなど實に面白き限りにしてかつ其頃の風俗の一つをも知る、かゝるものは他の書にあらず。

又土佐より京都に至るまで僅かの里程を六十日も費せしなど、當時運輸航海の如何に不便なりしかを知るに足るべし。

註釋本は樣々あれども、香川景樹が土佐日記創見尤も妙にして、岸本由豆流が土佐日記考證尤も詳はし。

近著紹介

吾家の歷史　明治三十年用　京橋區出雲町 警醒社發行

明治三十年用は汎く世上の意見により其體裁を改めし由にて二十九年用とは面目一新せり卷頭に敎育勅語、歷代天皇御名、帝國軍艦、登錄稅法等を揭げ從來の節用を廢し趣味ある繪畫幷名歌名句を載せ其他體裁大に整へり、但し警醒社が敎育勅語を載せたるは此書を以て嚆矢とす、定價三十錢、特別製五十錢

男子は智識あるべく女子は溫柔なるべし（ヘルベルト）



家政

話のくさ〲　黃花

英米細君の相違

英吉利の細君と亞米利加の細君と、いろ〲相違ある中に、尤も著しきは。英國の細君は槪して夫の外に出て、爲す事業にあまり頓着せず、夫の歸りても事務の話を聞くを好まざれば、事務につきての來客あるを喜ばず、從て細君は夫の事業に餘程くらきの患あり。米國の細君は之に反して、何事業何商賣にせよ、夫の爲す所は必ず之に注意し、事業につきての相談相手ともなり助言者ともなり、夫が其局面に當りて往々迷惑する樣なる事ある時も局外にありて靜かに考へて、よき工夫をつけ夫を助けるなり。先頃英人某米國に來りて

歎息していひけるは、米國に實業界の成功者多きは細君の力多きに居るといふ可し、米國婦人の其夫の事業に通じ居れること實に驚くの外なし、此等の婦人は眼にこそ見えね其夫の成功を來す大原因なりと。

笑ふ家

笑ふ門に福來ると。醫者の說にも笑は消化機の働を促し血液の流動を助け、其他いろ〱身体に益ありといふのみならで、笑は實に幸福の聲春風の如く暖に日光の如く快よきものなり。嬉しければ笑ふ、笑へばまた快よし、何卒苦笑、冷笑、追從笑、などは千里の遠きに退けて、マッチ張る寡婦立ン坊の男までも日々幾回となく快よく打笑ふ時節となしたきものなり。

某女史といふ人あり。身の上不幸にして幾度となく悲しき事つらき事くやしき事に逢ひ、身も心もめりいる様に覺えければ、或日舊て心に誓ふ樣、斯くては果てじ、此れより氣を振り起すため、否でも應でも少なくも日に三度つゝは笑よく打笑ふ可しと。夫れより如何なる悲しき事堪へ難き事起り日にも、吾部屋に退きて日に三回は必ず腸の撚れるまで打笑ひける。初は夫子供も奇妙に思ひしが、何時となく笑の聲傳染して顏見れば可笑くなり、夫笑へば妻笑ひ子供笑また之を友達の子供に告げて笑へば友達も笑ひ、其子供また父母親類に告げれば父母親類にまで笑の聲傳染し、石木に葛

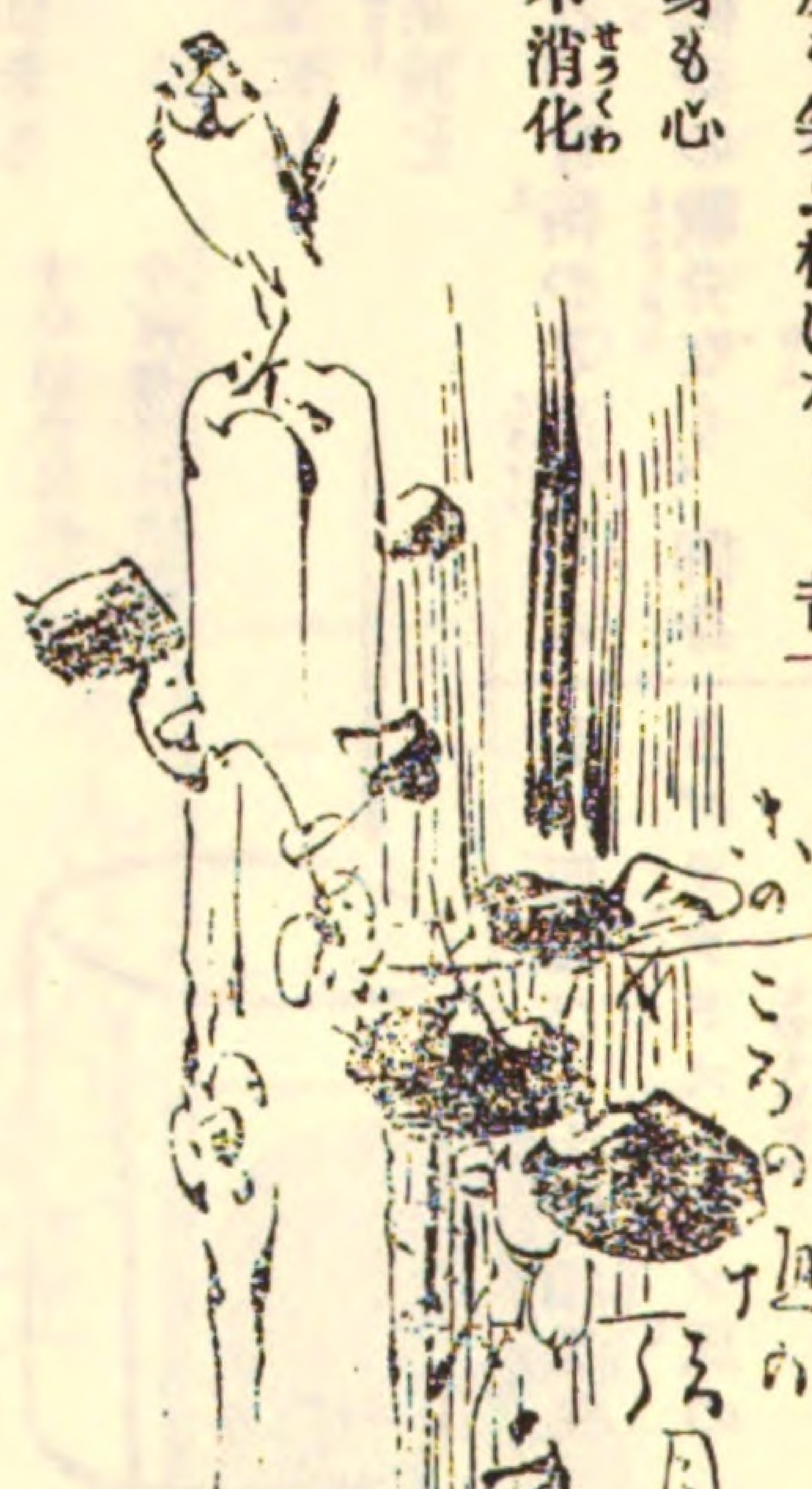


（初冬十二景）

ちて環の波の廣まり行く如く笑の聲は廣まりぬ。偖其結果は如何といふに女史此頃人に語りて曰く、妾か三笑の規則を定めしは十二年前なりしが、昔は務めてせし笑今は自然の笑となりて、家にありても外にありても今は日々三度のみならで三十度も笑ふ樣になり、昔は色々の悲に壓せられしも今は身も心も輕く覺え、昔は胃病にて常々不消化に惱みつるか今は絕へて不消化の不の字も知らず、昔は毎日の樣に頭痛せしが六年このかた頭痛は頓斗忘れたる樣にて、久しく住みし家も何時しか新なる心地せられ、夫は生れかはりし如くなり、子供は何某さんの笑ひ娘といはれる程快活なる兒女となりぬと。

大人の妻

英雄の夫に力量の妻あるは、諺にもいふ鬼に鐵棒にて、政子の頼朝を助け、呂后の漢高祖を助け、ヂズレリー夫人の其夫を助け、フオセット夫人の其夫を助けたるなど誠に著しきものなり。されど良人程の力量學問智識なければ大人豪傑の妻たる能はすといはゞ、世の俊傑は一生獨身にて暮らさねばならぬ者多かる可し。猿の面見て英雄をまのあたりに失ひつる木下藤吉の前の妻、直くなる鈎に白髮まで添ひし世にまれなる、翁をふりすてし人などは論なし。すぐれて愚ならず誠心だにある婦人ならば、大人の妻として盡し得る所なから

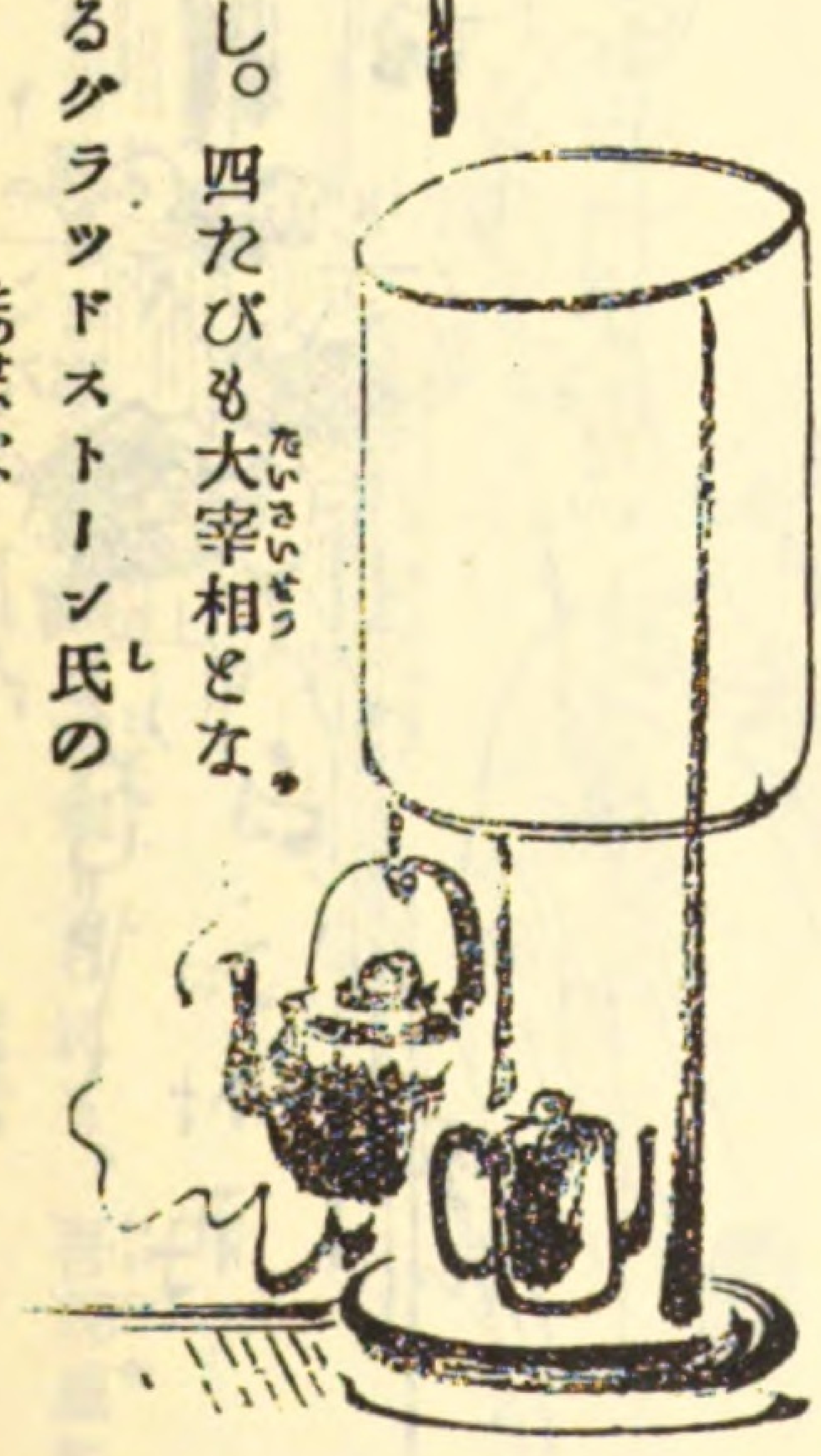


(初冬十二景)

めやは。一昨年の冬逝きしビスマーク夫人は、固より秀でし婦人なりしも、ビスマーク公に比しては大小を論ずる迄もなかりし。されど夫人は獨逸細君の摸範と稱せられ、公は生命の如くに夫人を愛し、其逝くや獨逸新聞は筆を揃へて公の事業は夫人に負ふ所多しと賛しぬ。グラッドストーン夫人の如きも亦然り。

十年楚水楓林下。
今夜初聞長樂鐘。

グラッドストーン夫人は二十八歳にして嫁しぬ。其時媒妁者なりける某詩を作りて壽をいひぬ、御身が此度なづけ得つる高潔なる心の疲れ勞れむ時之を慰むるは御身の職分なり、御身は香しき風となりて常に良人の君を吹き、清き泉となりて常に良人の側に歌へと。五十幾年過ぎ來りて、夫人の生涯を顧るに誠に其期望に負かざりき。力量より云へば、グラッドストーン氏と夫人との懸隔は、釣鐘に提燈ともいふべき程なり。されば夫に對して天下の經綸を談じ、帷幄の中に謀を廻らして政敵を千里の外に挫くなどの事は夫人のよくする所にあらず。されど夫人は誠に女らしきやさしき實意ある婦人にて、家政をよくし、よく子供を育て、身も心も全く夫に捧げて夫の事としいへば必らず自らして他人に渡すことなし。四たびも大宰相となるグラッドストーン氏の事とて、其政界に奔走中の繁忙なること譬ふるにものなく、夫人は吾良人ながらも氏に面會することいと稀にて、英人の噂話にも斯る時は夫人は何處かの宴會に招かれて初めて吾良人に面會するを得る程なれば其節は夫人は成る可く主人に



（初冬十二景）

依頼して良人の側に坐し僅かに三四分の閑を得て要談をなすといふ程なり。併し夫人は少しも國を先にして家を後にすることを唸やかず惜氣もなく其良人を國に與へ、自からは家を守りて良人をして少しも内顧の患なからしめぬ。夫人が其夫の爲めすること、到らぬ隈なし。老年の今日も旅中はアルコールランプを携へて、旅舘につかぬ時は一寸したるものを自ら料理して良人にすゝむ。

グラッドストーン氏の如き高き位置にあれば、喬木風多き譬の通り、種ゝ樣ゝの事うち來りて、隨分氣根を疲らす事多ければ、夫人は細かに心を用ひて無用なる事苦がき事は成るべく夫の耳に入れぬ樣注意して夫の氣力を消磨せざる樣に務めぬ。曾てタイムス新聞にグラッドストーン氏の惡口を書きけるに、夫人は良人之を見れば無用なることに憤を發して益なからんことを慮りて其新聞が夜すがら吾腰掛の下に敷き、終に良人に見せざりしこともあり。夫人は實に吾力量の程を知りて、及ばざる處は斷念し、及ぶ所は十分に盡し、家を齊へ身を脩め博愛慈善の事を務めて、夫の爲めに安息の場所をつくりぬ。



(初冬十二景)

人の性分を刀に譬ふれば、砥石を要する刀あれば、鞘を要する刀もあり。グラッドストーン氏の如きはさなきだに鋭き火の出るばかりの性質、夫人の如き靜淑の妻あることそよく多忙なる氏が生涯に安息を與へ、九十

近き今日まで氏を老健ならしめたるなれ。

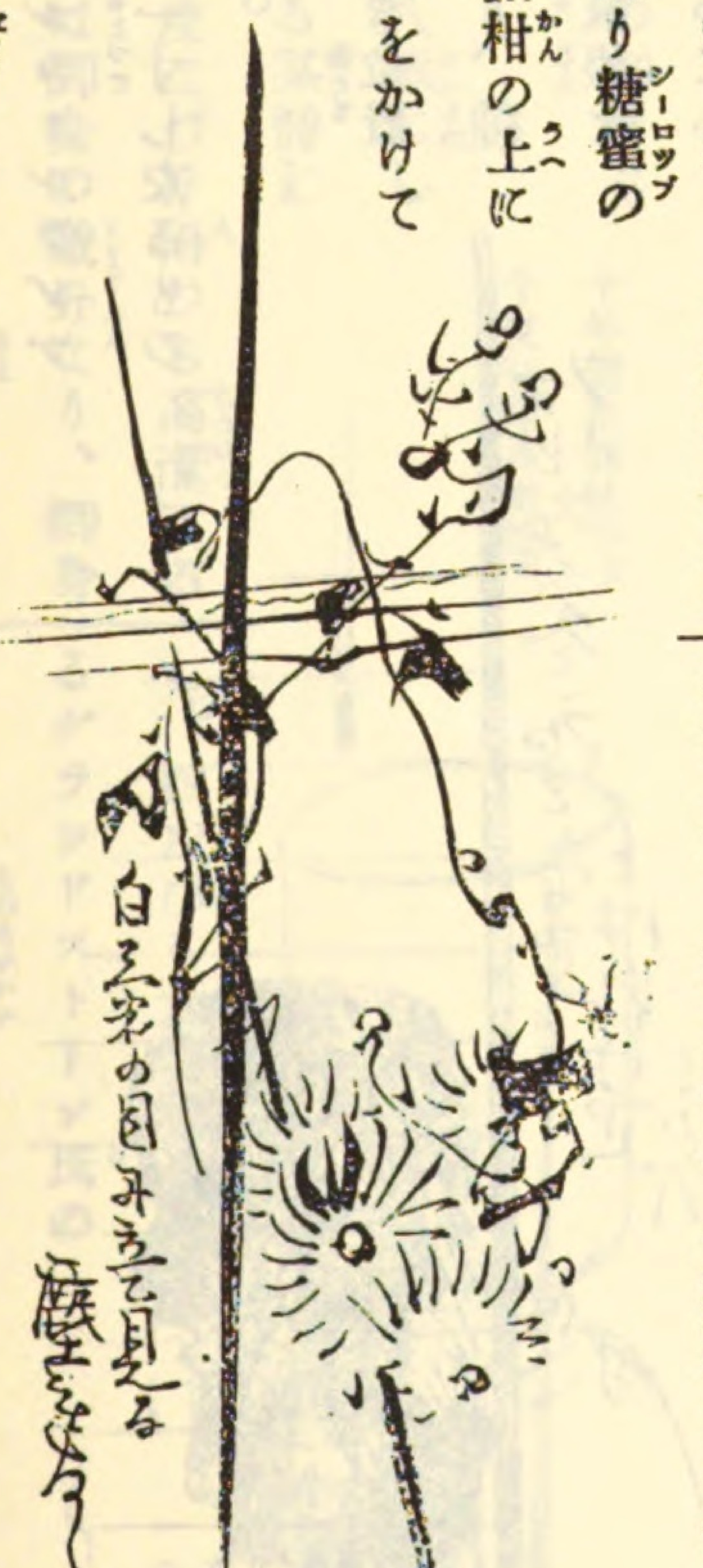
蜜柑菓子

もはや蜜柑の盛りとなり、其用多き事なるが、爰にめづらしき上等の蜜柑菓子あり。先づ五備ばかりの蜜柑をとりて皮を去り輪切にして鉢に盛り、角砂糖一斤にレモンを少し加へ微火にてねり糖蜜のやうになりたるところにて蜜柑の上にかけひやし、此上にクリームをかけて出すものにて頗る美麗なるものなり。

蟹

六個ばかりの蟹をよくうでゝ肉を取り、卵三個をよくかきまぜこれに大匕三ばいのパン粉、二匕のからし、一匕のばた、一匕の酢とを混和し、よくこねてクロッケーの形につくり、別に卵をかきまぜ置きてこれに浸し、パン粉の上にころばし製脂かバタにてやくなり、其佳味他に類を見ず

蟹十二を湯煮て甲を破はさぬやう丁寧にはなし置き、さて肉をとりてパン粉大匕五ッ、辛子一匕、酢一匕、乳コップ半杯、卵二個を加え、よく／＼かきまぜて糊の如くなりたる處にて胡椒鹽を入れて加減し、さきの甲の内を清淨に洗ひたる中に入れ、パン粉をふりかけてバタか製脂にてやくなり。



(初冬十二景)

不注意

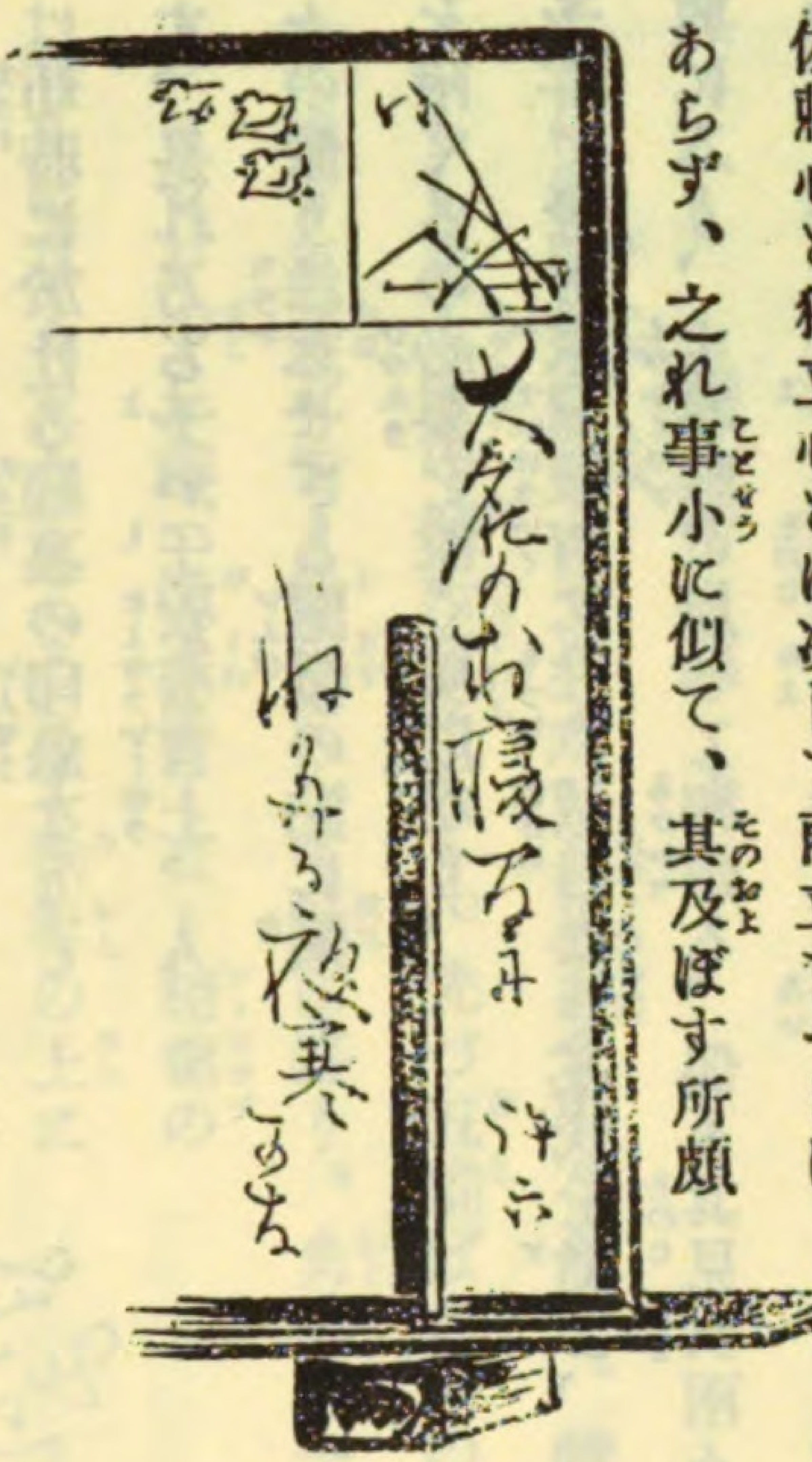
恕哉

子女を養育する上に於て最も注意すべきは人々の餘り氣の附かぬ隱微の點にありとす、恰も雪の如き皓々たる腦裏に對しては、些少の塵芥も倘ほ印象せらるゝなり、而して其印象たるや、之を大にしては終世を支配する程の勢力を持續するものあり、故に人世の言動を支配すべき、重なる原動力は幼時に於ける腦裏の印象なりとす、是れ乃ち予が子女養育上、人々の餘り注意せざる隱微の點に氣を附くるの必要を說く所以なり、予嘗て最も家庭敎育に注意拔目なき某氏を訪ふ、談話興に入り、主客膝を崩して相語る、偶ま其兒女兩々相拉して來る、予は其次女の餘りに愛らしきを以て、思はず抱いて之を膝上に坐せしむ、某氏眉を顰め予に告げて曰く、願くは抱くことを止めよ、予其由を尋ねければ、某氏靜かに說きて曰ふ、人は須らく獨立獨行の氣象なかる可からず、而して其氣象を養ふ家庭に於てするより先なるは無し、世人多くは其子女の可愛さに、常に抱きつめて離さぬものさへあるなり、之れ甚だ憂ふべきの至りにして、原來子女を抱くは、子女に對して獨立獨行の氣象を挫折するの害あり、彼已に人に抱かる、是れ人に依賴するの心を起すの萌芽なり、



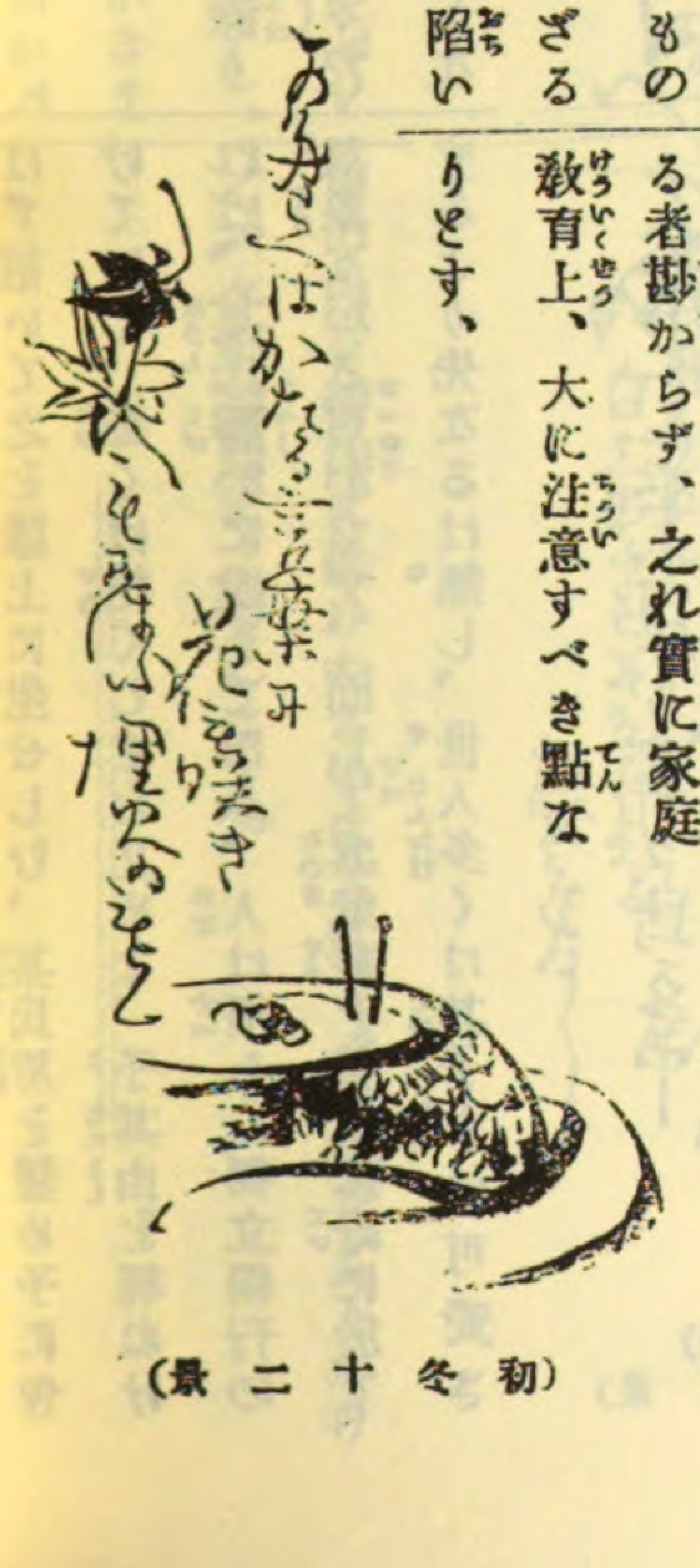
(初冬 十二景)

依頼心と獨立心とは決して両立すべきにあらず、之れ事小に似て、其及ぼす所頗る大なり、切言せば、子女を抱くの害は、延ひて國民の獨立心を消磨するに足ると言ふも可ならんと、予甚だ其言の味ひあるを感ぜり、兒を持てる父母たるものは、宜しく此邊に鑑みて、微細の點にまで注意せざる可からず、爰に矢張り隠微の不行届より、奇禍に陷いらんとせし一話あり、ニューロンドンの造船所にて、一の救助船を新造せし際、船大工過つて鐵鎚を船底に忘れ置き、遂に其儘板を張りしかば鐵鎚は、見えざる船底の空隙に封入せられ、



（初冬十二景）

船の動く毎にガタリ〳〵と轉動しけるが、暫時にして船底に大なる穴を生じ、遂に木の部分全く突き破られ、漸く銅板のみにて支へられたり、若し此銅板をも破らば、幾多の生靈那落の底に藻屑となりしならん、幸にして之を發見し、禍を未發に防ぐことを得たりと云ふ、無邪氣なる黄口の稚兒、白紙の如き玲瓏なる腦漿、若し父母にして不注意にも過つて子女の心底に落し置きたる鐵鎚あらんには、其成長後の成敗蓋し如何あらん、身を亡ぼし、家を倒す、原因する所、其父母に在る者尠からず、之れ實に家庭敎育上、大に注意すべき點なりとす、



（初冬十二景）

手毬

追々歳暮にも近づきたれば、無邪氣なる兒女諸君は一



(初冬十二景)

夜明くれば賑でと正月の來るを待ち焦がるゝなるべし、分けて小女の樂とするは、手毬の遊戲なるが、學校の科業の閑などには、今から手毬をこしらへ置かば、又一層の樂ならんか、能く知り渡つたることなれど、どうしたらば輕くて彈力のよいものが製し得らるゝか。

◎心に海綿を容れて其上を薄く綿にてくるみ色糸にて摸樣をつけなば申分なき手毬を得らるべけれど、海綿は安價のものにあらず。

◎心をゴムの風船玉を適宜の大きさに膨脹せしめ、空洞にしたる其上を薄く眞綿にてくるみ、其上を色毛糸にてからめば輕くして彈むことこれに上越ものはなけれど、餘り輕過ぎて手應なく、且つ長保せぬは此手毬の弱點と知り玉へ。

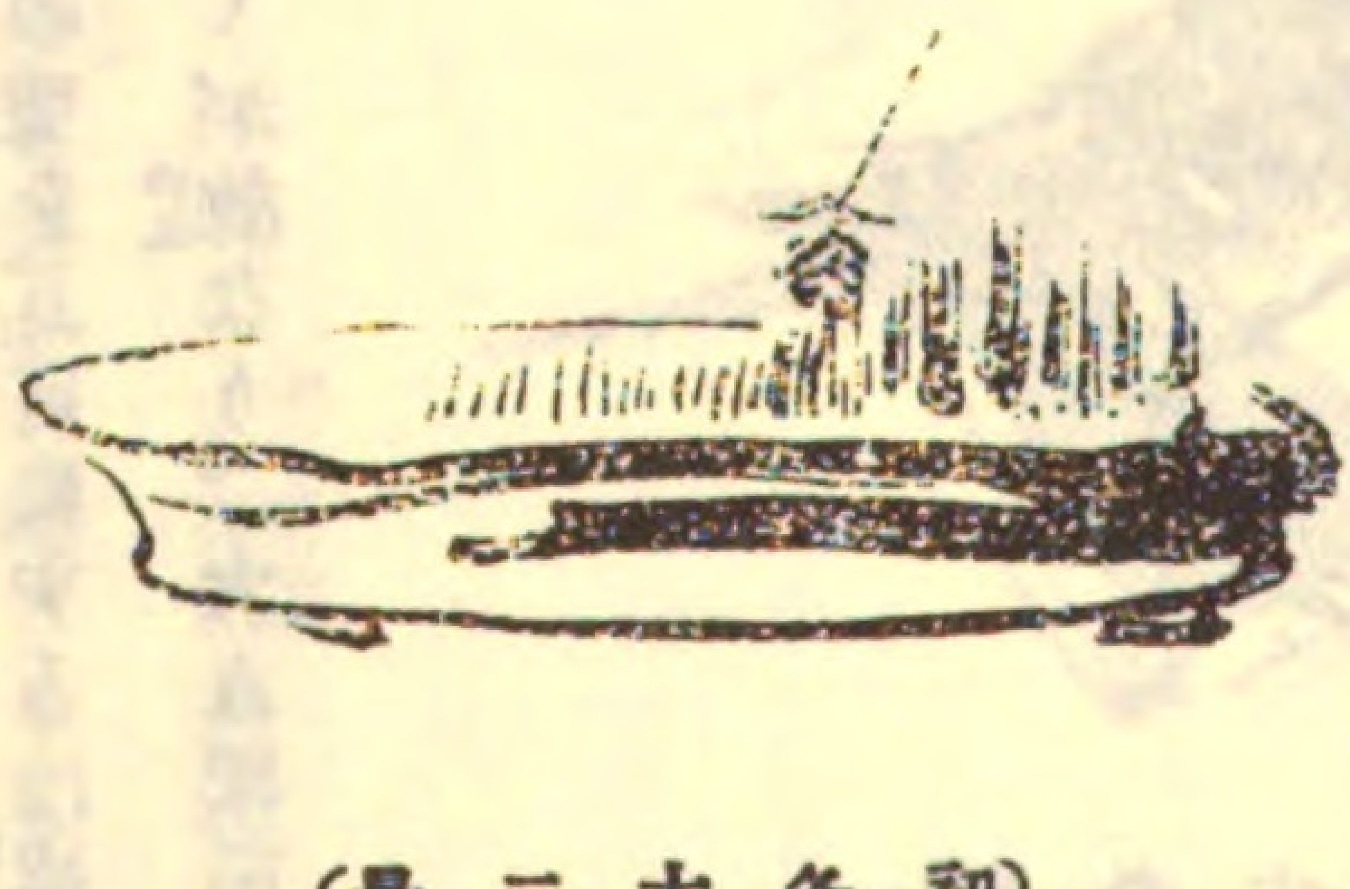
◎パンヤを心に容るゝもよし。

◎糸爪の心の乾きたるものを容れても毬に彈力あり。

◎蘇鐵の綿(赤色を爲せり葉の根にあり)を用ゆるも面白し。

◎燈心を容るれば輕く

萬里淸江萬里天、一村桑樹一村烟



(初冬十二景)

してはづむこと妙なれば、これ一般の流行。

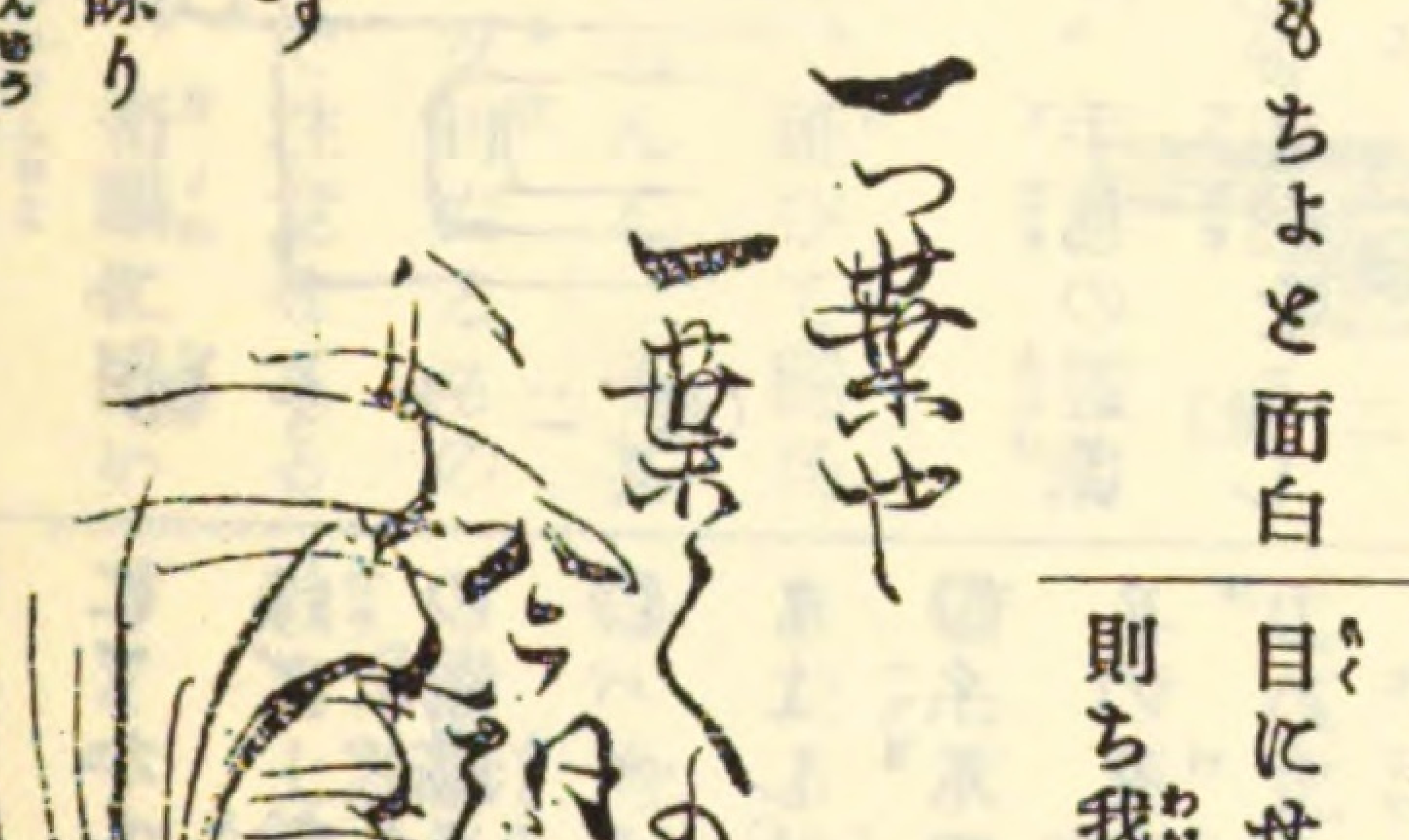
◎心に鉋屑を容れてもよけれど、これは餘り彈力には適せず、大なる毬などを製する時、綿の儉約の爲なり。

◎農家などにては、芋殻を容る、これもちよと面白し。

◎ゴム毬などの破損したるもの丶上を綿にてくるみ、又は片々となりたるゴム毬を心に容れてもよし。

風俗壞亂は猥褻のみならず

風俗壞亂は猥褻のみと思ふは非なり、餘り殘酷なる事、餘り汚穢なる事、餘り非人情なる事は、風俗を壞亂すること猥褻と同論なり、近頃書生演劇や小新聞の雜報、小説などに此弊多く、其挿畫に至りては實に見るに忍びざる慘酷の事、汚穢の事非人情の事あり昔は、孔子、君子は庖厨を遠かると言へり、これ其慘酷の狀、慘酷の聲を耳目にするは德心を害することの大なるを恐るゝが故なり、大人に於ても成るべくかゝる事を耳目にせぬやうにするは、則ち我道德心を養ふもの



（初冬十二景）

にして、我國の小說、演劇、繪畫等の泰西に比して幼稚たるを免れざるは此弊あるによる、殊更小兒教育に熱心なる兩親達は繪畫、玩具等に於ても、非人情の

ものを耳目にさせぬやう注意ありたし

内職案内

楠玉の簪製造

此職は縮緬及紅絹等の帛布を用ひ、梅、櫻、菊等四季色々の花寄模樣を圓形即ち楠玉に作るものにて、此の職は美術に屬し頗る緻密の業なれば敎習と熟練を要するなり、されば内職といはんより寧ろ本職といはん方至當なれど重に本職人として營む男子の外にも細君及兒女等家事の餘暇に内職とするものも亦多ければ玆には女子の内職として案内することゝなしぬ、此の職は他の内職と異りて見習を要し十才以上のものは誰にても無月謝にて見習生となるを得、其の期限はその人の器用無器用にも依ることなれど大抵は二ヶ月内外なり、見習終り獨立して自宅に於て内職として營むに至れば、凡そ出來高賣價の二割位に相當する賃錢を得べし、これを本職とするものは一人一日四十錢より六十錢七十錢位に至る隨分多額の賃金を得れども、内職者は外に業務を控へ間暇少なければ左樣に多額の收益を希ふべからざること勿論なり、されど内職者も熟練次第にて一日に十五錢より二十六七錢の間は容易に得らるべし、

此楠玉製造は女子の内職としては誠に上品且美麗にて且愉快の職業なれば婦女の品性を養ふ方便ともならんか、兎に角婦女には適當なる美術的内職業といふべし。



(初冬十二景)

社交一斑

流行の栞

流行子

履物

目下流行の履物並其價大畧を摘まば本年は桐の價格昨年來より凡そ三割方の騰貴にて極安物は殆んど倍增なり、南部表格外に高直なる爲め自然籐表を用ゆると、婦人向鼻緒の華美なると、總じて緒の太きとは昨今の流行なり◎男物＝横柾、南部表或は籐、幅廣臺にて背は二寸位の處、鼻緒は鹿皮鼠色の極太きもの或は絹通風市樂極上にては鰐又は蛇革價一圓七十錢より中等にて一圓より一圓五十錢まで◎婦人向＝白木にては小町形雨ぐり背は二寸塗物は黒塗にて小町形跡丸二寸二分以上何れも表は南部又は籐、緒は木天の太きもの上等は紋天繻珍、色は凡て華美なるもの流行り地味なるは墨流玉虫、價は一圓より一圓五十錢上物は一圓六七十錢より三圓位迄極安物は絹天九寸二分表は地白まがひ南部三十五錢より六七十錢◎女兒娘＝雨ぐり、小町、又は彫（ポックリ）背高く、緒は繻珍の華美な物にて持切り◎雪駄＝は廢氣味にて一圓より二圓五十錢の上物のみ捌ける由

源氏貝合の後挿

珠簪以外に一種の趣味を有し、若き婦人には珠簪の添挿とし、年增の婦人には此品一本にて後挿となるものは、新流行の源氏貝合の後挿とす、即ち銀と錫銅との張分にして耳かきと脚とを銀にし、貝は錫銅にし、源氏模樣を象眼にす、最も澁味ある品なり、價は壹圓内外なりと聞けば必らず一斑の流行となるべし

雜録

兄と妹

湖處子

（これも英國に行はるゝ寢物語の一なり）

兄は妹の手をとつて悲しげに云ひますには、お前だつて僕だつて、眞實の御慈母さんさへ、無事に存命へていて下すつたら、恁んな辛い目には遇ひはしまひに、今のお繼母さんといつたら、何故こんなに僕等を虐待

なさるたらう、あの玉(猫の名)にはいつも肴やなにかを遣つて、撫て擦りして寵愛かりなさるくせに、僕等には三度の食事さへ碌には食して下さらないのみか、毎日〳〵撲たり擲たり、それはまだいゝけれど、こんなに逐ひ出されてしまつては、行處がありやしない、本當に何處へ適つたらよからう、あゝ神樣、お慈母樣憫然と我等を思し召さば、路頭に迷ふこの二人を、どうぞ天國にお連れなすつて下さりませ、御願で御坐ります。

沖に漂ふ捨小舟の寄邊なきが如く、廣き野原を、ふら〳〵と漂泊ふうち、二人はいつしか深き森の中に迷ひ入りましたが、其時丁度日は暮れて、四方は暗くなりました、梢をわたる小夜嵐に、冷たき露はほろ〳〵と二人の顏にこぼれかゝります、妹は俄かに空を見あげて、御慈母さんも、私等の樣に涙をこぼして居らすしやるのかしらと云ひました。

さて二人は、空腹じいのと悲じいのと疲たので、がくかりとなりましたが、やう〳〵。とある木の洞の中に這ひこんで、其夜は天國を思ひ寢の夢を結びました。目覺しときは、日は高く上つてゐました、二人はいたく渇きますので、流やあると森の中を出で行きました。

ア、水が呑みたひ、水が呑みたひ、喉が引きつツて、苦しくつて仕方がない、何處にか水がありそうなものだあれ、何處にか水の音が、チロ〳〵チロ〳〵ねえ、それ聞えるだらう、難有い〳〵さあ行う。

兄は妹の手をとつて、音する方に飛んで行きました。さてかの繼母と云ふのは、實は恐ろしい魔術娑でありますから、この水で同胞を苦しめてくれんと企んでいるのを、二人は何で覺りませう。

唯神の與と兄は喜こび、がぶりと一口呑んとするを、妹はあはてゝ推し留め。

おれ兄さん、水がもの言つているのよ、おれおれ、
己を呑む奴は、獅子になつちまうぞ。
つて。お〻怖い、兄さん呑むのはお止なさいな、獅子にでもなると大變ですから。

兄は妹の言葉に從ひ、その川を見捨て〻たどり行くうち、また一の流に出ました、また妹は止めました。

兄さんこれも呑んではいけません。
おれを呑む奴は狼になるぞ。
と云つて居るんですもの、兄さん、狼になつたら妾食殺されつちまうわ。

兄はさも〳〵悲しそうな聲をして、此度までは、どうか、こうか、耐えても居やうが、此次はお前がいくら留めても、水が何と云つても、もう〳〵辛抱はしきれないよと云ひました。

さてこれをも見捨て〻たどりゆく中、また一ツの流に出ました。妹は聽く。

おれを呑む奴は鹿になるぞ。
と云ふ聲を聞きましたから、妹は留めては見ましたが、兄も此度はいよ〳〵たまらなくなつて、とう〳〵一掬呑みました。すると案の如く鹿になりました。あれ兄さんが鹿になつてと、妹は泣く、鹿も鳴く。

妹は漸く涙を拂ひ、鹿や、もう鳴かなくつてもい〻よ妾は決してお前を見棄る樣なとはしないからと、云ひつ〻、身に絞めていた細帶を解いて首環を造り、茅を集めて小綱を纏り、これを鹿につけて、森の中に牽て行き、森の中に其身と鹿を容る〻に足るほどの、さ〻やかなる小舎を見付出し、そこに雨露を凌ぐとといたしました。

それからといふものは、妹は毎朝〳〵自分の食ふべき木の實草の實、鹿の食ふべき秣刈草を獲りに行きました。夜は祈禱が濟めば、ふく〳〵と柔かい、鹿の背に枕して、何とも云へぬよき心地になりて眠りました。

ある日この森に、角笛の音、犬の聲、砲の響、咄喊の聲が壯んに起りました。このは時の國王が、御遊獵をあそばさるゝので、この物音をきゝし鹿は、ムックと蹶ね起き、獵見物に行かして呉れと、熱心に願ひました。妹はいや／＼ながらこれを許して云ひますには、だが妾はお前が出た後には、萬一のとがあるといけないから戸を閉て置きますよ、お前お歸宅のときは、忘れない樣に妹や歸つて來たから、こゝ開けてと云つて頂戴よ。

鹿はもう狹つくるしい小舍から廣き世界に出るのが嬉しさに、妹の言詞も碌には聞ないて飛んて行ました。國王初め隼人の面々、この美しき鹿を見るや否、それ逃すな、稀有の獲物なるぞ、生捕にせよと口々に罵り合ひて追かけましたので鹿はほう／＼の態になつて歸つて來ました。

妹や今歸つて來たこゝあけて。戸は開きました、鹿は飛ひ込むと直に柔かなる床の上に寐轉ひました。

翌朝また角笛の音か聞えました、鹿はむく／＼と起きあがつて、ア、あの音を聞くと落付て居れぬ、けふもどうか行かして呉れ。

見に行くはよけれと忘れずに、昨夜の樣に云つて頂戴よと云ひつゝ妹は鹿を放ちやりました。

此の日、鹿は終日追ひまはされたので、足に輕傷を負ひ跛ひき／＼歸つて來るところを供人の一人は、戸の際まで追隨て來て、鹿がこゝ開けてと云ひしこと、戸が開いて美しき少女の出てしことなと限なく見屆けこの由を國王に奏しましたすると、殿下には龍顏麗しく、さらば明日今一度獵を催さんと御意遊はされました。

妹は鹿の傷を負て歸つて來たのに膽をつぶし、手捷く其毛に入染める血を洗ひ落し傷口に一年菓(血止)を張

るなどして、いたはりました。

翌朝角笛の聞える頃には、傷は痕なく愉つていました

そこで鹿はまた〳〵ひよこ〳〵と飛ひ出そうとする妹は周章てゝ、今日ばかりは行かすにいて頂戴、お前か殺されでもしやうもんなら妾は如何程に寂しいからうと云ひつゝ留めましたかなか〳〵聞ません、お前かそんなに留むるなら、わしや泣死するより外はないと云ひますので、仕方なく其自由に委すれは、鹿は大喜ひに飛んで行きました。

王はいち早く鹿に目をとめて、それ獲物か來つるぞ、靜かに追へ傷負すなと下知になりました。

暮れつ方王は前日鹿の後を追隨し、隼人の案内によりてかの小舍に行幸遊はされ靜かに扉を叩き、妹よ今歸んぬこゝ開けてとおとなひ玉ふにアイと答へて戸を開けは、鹿にはあらて見も知らぬ高貴人の戸の外に佇み玉へるに呆れまどひて立ちたり少女の姿の神々しさは畫にもあるまじと、王はほゝ笑まれ、さもなれ〳〵しく其手をとり、やよ少女余と共に宮居に行く心はなきや、余は御身を妃となさん、いかで〳〵、と宣へは少女は輕くうなつき、妾には一足の鹿かあります、それをさへ共に許し玉はゞと應へました。

そはおん身の自由にと宣ふをりから鹿はのこ〳〵歸つて來ましたかこの樣を見ていたく滿足の態に見えました

そこで國王はその玉馬に少女を騎せ、鹿諸共雲深き八重をさして御還幸になりました。

今頃は定めし猛獸の餌食となる、遊獵の犧牲となつてくたばつたてあらうと底氣味よく思ひし、その二人が思ひもかけぬ立身出世に非道なる繼母、いたく業を沸かしましたかことに眼を一つしか有たぬその一人娘はおのれよくも〳〵我を除物にして玉の輿に乘り居つたなど、瞋恚の面想恐ろしく喚きたてました、それを母

はやう／＼に、すかし宥めてさて耳に口何事をか囁きました。

一月二月比翼の衾を重ね給ふうち姫宮は早くも懐妊となられましたが、君の御遊獵にお出ましのうち玉の様なる若宮御誕生になりました、そこで魔術婆は折こそ來たれと打喜び、忽然侍女の姿に化け妃の前に手をつかへ、御湯か熱きまして御座ります、さゝ冷めない中にちやつとお召し遊ばせ產後には第一保養に御座りまするとまんまと欺き、湯に入れて上から湯蓋をいたしましたから、姫宮は無殘にも風呂桶の沫泡と消えました。

さて魔術姫は妃の衣をすつかり、自分の娘に着せて妃閨の中にそつと寐かして置きました。

數日經ぢて國王は、御還幸になりました、若宮誕生のどを聞こしめされて御喜悅斜ならず、いざ產婦に對面せんと起ち玉ふを魔術婆はしはしと袖をひかへて御對面遊ばすはよけれど光を見せては、血の道に毒で御座りますれば、今暫時御遠慮遊ばす方がよろしう御座りませうと申しましたから、瞞かれたりと知らぬが佛の王様は、一つ目玉の夜叉娘を眞の妃と蔭ながら御寵愛遊ばされました。

ところがこゝに一つ不思議なるとか起りました、それはある草木も眠る眞夜中頃にお守の役の侍女か乳を求めてむづかり玉ふ若宮のなだめても、すかしても聞入玉はぬに、はと／＼持餘して居る折から、髪もしどろに憔れ玉ひし妃の姿現はれ泣く子を抱きとりて節あはれに、

坊やはいゝ子よ寐んねしな、坊やかお鹿はどこへいた。

と歌ひさて泣きやめはまたもとの處に寐かしてすご／＼と出で行きます、これが一晩ではなく殆んど毎晩つゞきますので、ある日王にこのとを聞え上げますと

王はいたく驚かせ玉ひ、そは不思議なり、余に二人の妃はなきに、さては變化の業なりよな、よし、今夜自から其室に徹夜なし變化の正躰見屆けくれむ。

さて眞夜中となりました時刻違えず妃の姿は現はれました例の通りに、

坊やはいゝ子よ寐んねしな、坊やのお鹿はどこへいた。

と歌ひます其聲がいかにも妙ので王はいとゞあはれを感じ玉ひ思はず叫はれました。

御身はまさしく我か妃して淺間しきその姿は。

まこと妾は、貴君樣の妃怪しみ玉ふも御無理では御座りませぬ、實は、とこれより非道なる繼母のために無殘の最後を遂げしと、神の惠によりて復ひ娑婆に活きかへりしとを逐一奏問せしに王は大に喜び且つ怒らせ玉ひて直ちにかの憎むべき母と娘とを死刑に處せられました。こゝに初めて魔術は解け、鹿は再びもとの若者となり兄妹睦ましく、幸福なる生涯を送りました。

支那の結婚式（下）

快哉生

間も無く行列は婿殿の家に達しますと、豫て準備したる爆竹に火を放ちて歡迎の意を表します、其の音パン〳〵パッチ〳〵至極壯快なもので、門前宛然ら一齊射撃を爲す樣な心地が致します、行列の乞食共は此處で歸暇を頂き各々、大皷笛鐘銅羅の類を携へて何處方へか參りますれば、殘るは新嫁の玉の輿と親族の馬車許り、玉の輿へは嫁の乘り居る儘門內へ舁き入れて、所謂結婚式の行はるゝ部屋の外まで運ばれます、美人か、醜婦か、賢女か、愚婦か、今しも新嫁の輿の内より出で來らんとする一刹那、新郎は日本の昔ならば麻上下當時ならば燕尾服とも申す可き禮服に、弓矢オッ取り

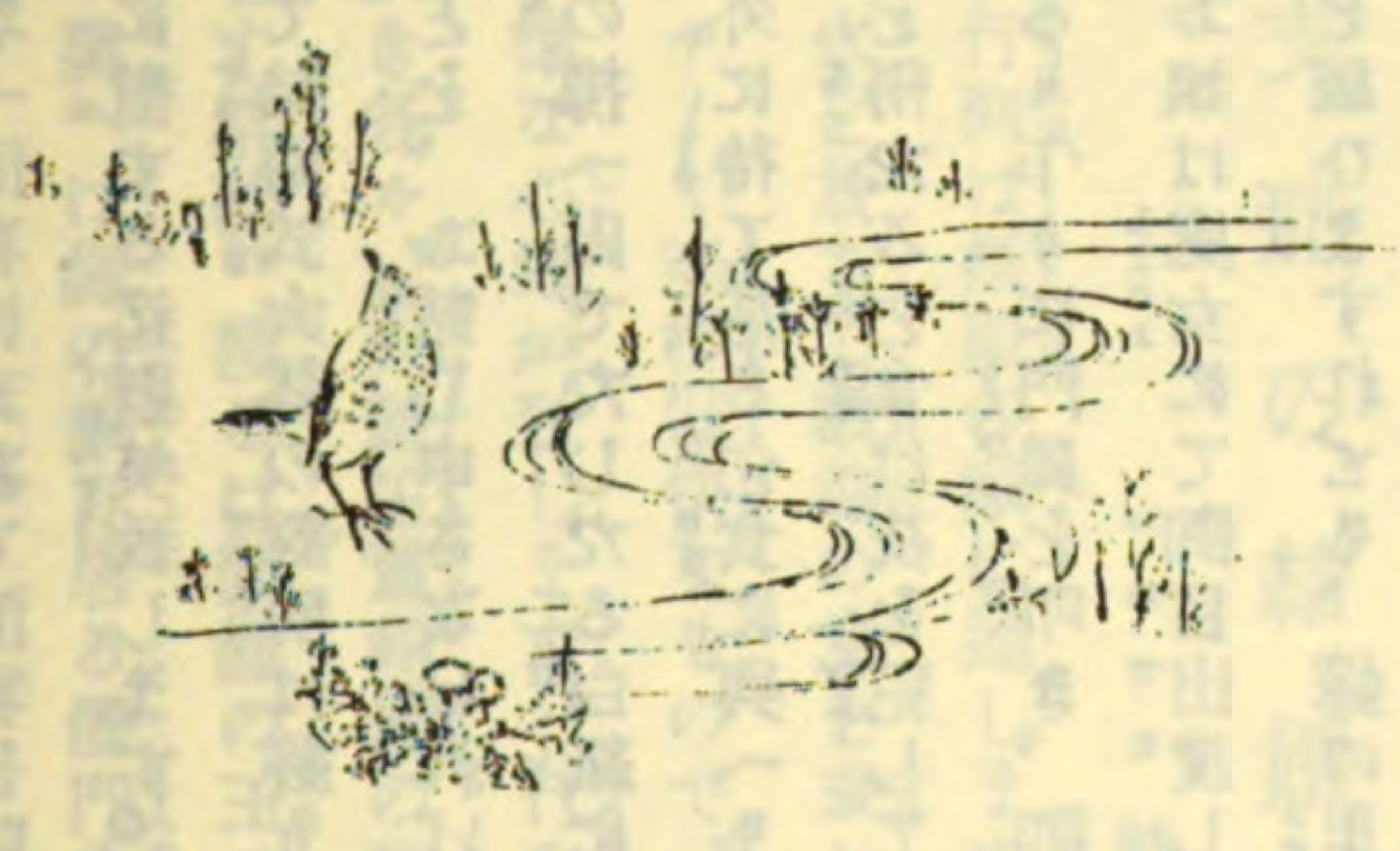
部屋の入口迄で走り寄りて、弦を滿月の如くにシボり乾の方角に向て三本の矢を放ちます、之れ新婦と共に惡魔の入るを防ぐの意を示したるものと申します。媒酌人に導かれ新婦は設けの席に就き。新郎も亦た其の席に就きまするや、生滿頭を半分に割りて、一半を新郎に與へ、殘る一半を新婦に與へ、媒酌人聲高からかに生が生(シオウブシオウ)と尋ねまするど、孰れも生(シオウ)と答へるのです、其の意は蓋し滿頭の生か生ならざるかを尋ねるのでありますれども、同時に兒が生れるか生れざるかを尋ねたるものとして、生即ち生れにと答へて緣起の宜きを示すものと致してあります、右終りますれば媒酌人は暫らく室外に出でまして、室内に殘るは、對向ひたる新郎新婦のみで、四海波穩やかに宜敷讀者諸君の御想像を願ひます。暫くの後媒酌人は再び室内に入り來りて、新郎新婦を導きて前申し上げましたる天盤の處に出で來り、今や酒宴を開かんとする親戚朋友知己に紹介致しますと同時に懷中より白紙に紅を塗りたるものを出だして、新婦の處女なりしとを證明し、所謂新郎新婦の爲めに萬歲を祝し、來客一同喜に充ちて酒宴を開き、酒地肉林、弦歌踏舞曉に徹する迄歡笑致します。

之れにて結婚式大躰の說明は終りましたが、今一つ面白しきとを、お話し申さなければなりません、先きに媒酌人の携へ出でたしたる白紙に紅の塗りある鐵ものは、門外に待て居る乞食に與へまする習慣がありまして、之を得たる乞食は夜を犯して直ちに、嫁の里に至り、破るゝ乍りに門扉を叩き、御目出度し御目出度し當家のお娘は處女にて御目出度しと申し、速かに門を開くとを願ひますれども、嫁の里にては成る丈け近隣に處女なりしとを知らせんが爲めに、容易に門を開きません、門を開かねば、開く迄で高聲に叫はり終に開くを待ちて、少許りの金を得て歸ります　(完)

木場利兵衛（口繪の繪解）

江戸に日雇を業とする利兵衛といへるものあり、そのわざを俗に木場といへばすなはち稱とす、幼年のとき仕へし主の家衰へはてゝ、九旬ばかりの老婆、賴むよすがもなく成りたるをはぐゝむに、わが、他に行きたる間、妻が仕ふることの疎ならんと疑ひ、明くれは、脊に負ひて、我行く處へ伴ひ、其の日の、しわざをなす傍に、物を敷きてすへ置き、わが喰ふものをわけてもてなす、其の外委しきことをば、しらねども、この一事をもてはかるべし、されば官に聞えて大に賞し給ひ、賜物ありけり、享保年間の事にて世にひろく稱へたれば、京にてもこれが姿を繪に書き、書狀をもあらく／＼しるして「木場利兵衛仁義禮智信」と呼はりて賣りしが、をかしかりきと、其の時をしる人がたりぬ

（近世畸人傳）



近世人物評傳叢書

第三冊

伊藤博文

（附）伊東巳代治○末松謙澄

定價金貳拾錢
郵稅金四錢
十一月十三日發賣

第壹冊既に四版を重ね第貳冊亦た三版の好況を見るに際して玆に第參冊として伊藤博文出づこれ蓋し近世人物評傳叢書中の尤も痛快なるもの伊藤が政界を弄せる如く著者は一管の餘瀝能く伊藤を弄せりこれ一の「淨玻璃鏡」なり彼の一身に纏綿附隨せる總ての物總ての事は今や赤裸々となつて映じ來るを見ん今や彼の敵も彼れを憐むの秋となれり今や彼の仇も彼を吊するの日には至れり滑脱宰相の末路何ぞ夫れ寂寞たる

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

緒方維嶽著
十二文豪號外 **シルレル**
定價十八錢　郵稅四錢

英國ギツビンス氏原著　日本水上梅彥譯
英國產業史 上卷
定價二十五錢　郵稅四錢

英國ギツビンス氏原著　日本水上梅彥譯
英國產業史 下卷
定價十五錢　郵稅二錢

平田久著（肖像入）
伊太利建國三傑
定價二十錢　郵稅四錢

稻垣滿次郎述
外交と外征
定價二十五錢　郵稅二錢

塚越芳太郎著
十二文豪第七卷 **近松門左衛門**
定價十八錢　郵稅四錢

山路彌吉著
十二文豪第八卷 **新井白石**
定價十八錢　郵稅四錢

發兌元　東京日吉町四番地　民友社

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六番地株式會社秀英舍印行